
きみを振り向かせるために

遠野 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみを振り向かせるために

【Nコード】

N8860K

【作者名】

遠野 雪

【あらすじ】

じつと俺を見ていた、まったく知らない彼女。

頭にきて怒鳴って見たら、彼女が見ていたのは俺じゃなくて制服でした。

現在、更新停止中。すみません。

最悪・1（前書き）

モテるけど、その所為でどこか捻じ曲がった性格の男子高生と、なんだか思考があっちの世界に行っている社会人女性との恋愛です。R15ですが、最後の方までほとんど出てこないぬるーい感じ予定です。

最悪・1

彼女との出会いは、俺にとって最悪で。
彼女にとっては、眼福だったみたいです。

第一章 最悪

「あぢい……」

ファストフードの店先でコーラを飲みながら、詰襟のホックをはずす。

「十月とはいえ、まだ冬服早いよなあ。気温とかで融通してくんねえかな」

「そりゃいいや」

高校の帰り道、男子高生三人で、詰襟で、真っ黒で。

見た目からして、暑くさい。

かといって脱ぐと手に持たなきゃいけないから、それも面倒くさい。

「大体、高校で学ランってどうなんだよ。俺、中学もだったんだぜ

？ブレザー着てみたかったなー」

俺の横で諦めて学ランを脱いだ奴、高坂 修平が百八十は越えている長身の身体を、植え込みのあるコンクリに重心を預けて溜息をついた。

筋肉のついたがっしりした体格で、つんつんと立った短めの髪は、爽やか好青年ってところか。

かなり、犬みたいな性格なんだけど。

バスケ部に所属していた（三年は夏で引退）こいつは、バスケの推薦で大学が決まっっていて、未だに部活に顔を出して後輩とボールを追ってる。

俺には無理な、熱さだ――

「今更言っなよ、修平。もう三年の秋」

俺の反対隣で学ランのボタンを全部外して暑そうに手で仰いでいる奴、梶 慶太が呆れた口調で返した。

百七十そこそこの身長、可愛い顔して毒舌大王なこいつは少し前まで生徒会の書記をやっていた。
だからか、なんか大人っぽい？

「三年だからいうんじゃない。大学入ったら、制服ねえんだし。なあ 涼介」

俺は残り少なくなったコーラを一気にストローで飲み干して、息をついた。

「ブレザーも面倒だぜ？ 学ランみたいに、Ｔシャツ下に着ていいわけじゃないし。まあ、できれば中学で学ラン、高校ブレザーの方がよかったな」

飲み終えたコーラの紙コップを手近なゴミ箱に放り投げて、修平を見あげる。

修平は俺を見下ろしながら、なんで？ と首を傾げた。

少しずつ下がった眼鏡を指で押して、位置を直す。

鼻んとこに汗かくから、暑いと面倒なんだよな。

寝坊して、コンタクトいれられなかったただけなんだけどさ。まあ、自業自得？

「中学のブレザーって、シンプルすぎてスーツみたいじゃんか。俺んとこのなんて、紺ブレに黒のボタンで留めるネクタイだった」

「ああ、あれってなんか子供っぽく感じるよね。せめて、ネクタイ結ばせろって思う」

慶太は顎に手を当てて、納得したかのように何度か頷いて俺を見た。

「でさ。身長百七十五センチ、少し茶色がかった地毛の格好いいと人気者の涼介くん。さっきからずっと気になってるんだけど——、気付いてる？」

その言葉に、修平じゃないけど同じ様に首を傾げる。

「自己紹介風の呼びかけをありがとう。……で、なにが？」

慶太は顎をしゃくるようにして、少し離れたところにあるベンチを指した。

つられてそっちを見ると、女が一人。

「うつわ、すげえガン見してやがる——」

腕を組んで背もたれに重心をかけながらこちらを見るその眼つきは。睨むでもなく、怒るでもなく。なんとなく身に覚えのあるその視線に、嫌気が差す。

俺の言葉を聞いて慶太は、ふうん、と呟いた。

「ずっと見てるから、知ってる人かと思った」

「気付いてんなら言えよ」

見てないで。

女から目を反らして、自分の手元を見る。

慶太は少し笑って、ぽんぽんと俺の頭を叩いた。

「いやあ、ナンパ来るかなとかいろいろな期待を。だって、涼介別れたばっかなんだろ？」

はた、と動きが止まる。

「ちよっとまで。何で知ってるそんなこと」

黙って聞いてた修平が、ここぞとばかりに食いついてきた。

「え？ お前もう別れたのかよ！ まだ二週間くらいしかたってねえのに！ しかも来週学祭なのに、もったいな——」

じろりと睨みあげると、視線を泳がせてうやむやに言葉を終わらせ

た。

「だって、結構言いふらしてたよ。今日」

「何を」

言いふらされること、なにもしてねーぞ。まだ。

「なんか、顔だけ……とか？ イメージと違う、とか？」

慶太の楽しそうな声が、すっげム力つく。

「顔だけって、それだけでもうらやましっ、いてえっ」

修平の見当外れの言葉を、足を蹴り飛ばして止める。
両手を組んで、溜息をついた。

「あーあーそうですよ、どうせ顔だけ男ですよ。昨日別れましたが、何か？」

「いや、だから顔だけでも羨ましい……」

今度は、慶太の睨みに止められた修平であつた。

「大体、顔だけで付き合つたの女の方だろ？ 俺、あんたの事知らないけどいいかって、最初に聞いたつてのに」
むすつした声で呟くと、再び修平がしゃべりだす。

「いや、知らないのに告白おっけーするのもどろっかと思う」
「修平、いい事言っね。たまには」

——的を得ているだけあって、言い返せません

最悪・1（後書き）

他に書いている君は何をぐで、詰まった時に書き始めたお話です。
そんなときに書いているので、おかしい話になるかもです（笑

更新は多分不定期でのんびりと……になる予定です^^

「涼介って俺から見ても確かにカッコイイけど、——お前、女に執着ないだろ？」

「——うん、ない」

慶太の問いに、即答。

「じゃあ、何で付き合っただよ」

修平の、まっとうな疑問。

「てか、何これ尋問？ 二人してうぜえな」

イラついた声を上げると、二人は俺の頭の上で目を合わせて頷いた。

「宮下 涼介くん。君の噂は、結構酷いものだよ。そりゃ、お前の性格知ってるから俺達は否定もできるし、流しもできるけどさ」
慶太の冷静な声って、時と場合によってはスゲいらつく。

——って、流すんかい

「どうして素行のよくないお前が、推薦で受験が終わってるってのが不公平でムカつく」

「そこかよ」

笑いながら頷く慶太を見上げた。

いや、心配されてるのは分かってんだけど。

でも、一応、俺にも主張はある。

「確かに、モテるさ。むかしっから。でも、皆みてんのは顔なんだよな。素を見せたってイメージが違うとか言われてみる。どーでもよくなるぜ、女なんか」

「じゃあ、付き合わなきゃ良いじゃない」
正論だな。

「振ればふつたで、しつこく付きまとわれてみ？　だったら付き合
って、振られた方が全然マシ」

断言。

女は振られるのは許せないけど、振るのは優越感込みで許せるらしい。

慶太は苦笑い気味に、俺の横に座った。

「なんというか、優しいのか優しくないのか」

「優しさだと思っぜ？」

俺の言葉に、修平は奥が深いとか呟いてるけど。

深いんじゃない。どーでもいいんだよ。

「じゃあ、あながちあの女の人も、しつこく付きまとうタイプなのかな？」

「んあ？」

視線を上げると

「うわ、まだ見てやがる」

さっきベンチで見ていた女、まだ同じ体勢で俺を見る。
ガン見。なんか、怖さまで感じますが――

どうせ、顔目当てなんだろう。
なんか、すごいま力ついてきた。

だいたい昨日別れた女も、一体何様だったんだ。
言いふらしたって、自分だけ被害者面しやがって。
なあ、その人。

あの女、昨日、俺に向かってなんて言ったと思う？

「あんだなんて、顔だけじゃないの！ 不感症！！」

あ、思い出したらちよつと傷ついた――

不感症の意味がわかんねえよ！
なにもしてねえだろ！！

こちら、ナイーヴ（ブじゃない）なお年頃だったんだ！

座つてたコンクリから立ち上がって、じつとこっちを見てる女をにらみつける。

「涼介？」

いきなり立ち上がった俺を、二人が怪訝そうに見る。

「なんか、すっげム力つく」

それだけ言い置いて、女めがけて歩き出す。

「お、おい。涼介、ちょっと待てって」

「何するつもりさ」

慌てて追いかけてくる二人を、無視して近づいていく。

大股で歩いて、その女の前に立ちはだかった。

「——おい」

いきなり目の前に立たれて驚いたらしく、頬杖をつくように手のひらにのせていた顔を少し上げて俺を見上げる。

大きな目をパチパチとさせて首をかしげている仕草が、小動物を見るようで、むかむかする。

自分は何も知りません、みたいな顔しやがって。

「俺に見惚れるのは勝手だけど、視線がうぜえんだよ。逆ナンなら間にあってっから」

見下ろしたまま、冷たい声で言い放つ。

後ろには追いついてきた二人が、黙って突っ立ってて。

勢いで言っただものの、何の反応も示さない目の前の女に怒りが積もる。

「何か言え」

「——逆ナン……?」

怪訝そうなその視線を、じつとにらみ返す。

睨んでいるつもりなのにちっとも怯まないその態度に、沸騰直前だった頭が余計に沸騰していく。

怒鳴ってやろうかと口を開いた時、横から割り込まれて視界がふさがる。

「おねーさん、突然ごめんね」

いきなり慶太が目の前に出て、しゃべりかけた。

「さっきから俺達の方、見てたでしょ？　あまりの視線の熱さに、何かなあと思って」

ある意味、こいつの方がタラシっぱいんですけど。

きょとんとして話を聞いていた女が、右手で左の手のひらをぽんつと叩いて頷いた。

「ごめんごめん、あんまりにもカッコイイから見惚れちゃって」

「やっぱり——」

逆ナンじゃねえかよ、とふてくされた声で言い捨てた途端、耳を疑う言葉が聞こえた。

「制服に」

——は？

「せ……いふく？」

怪訝そうな表情はいつの間にか少し笑みを湛えたものに変わって、楽しそうに話し出す。

「学ランっていいよね、カッコイイよね。やっぱり制服はこれだね」

まくし立てるようにしゃべるその女に、修平が不満声を漏らした。

「学ランなんて、嫌だよ。せめてブレザーとかさー」
その言葉に、女は右の人差し指を振って否定する。

って、何ナチュラルに会話してやがる！

「何言ってるの。ブレザーなんてスーツの同類じゃない。大人になれば、いくらでも着れるわよ。でも、学ランっていうか詰襟はそうはいかない。これは、そう。男子学生にだけ許された、スバラシイ特権だわ。それ着てるだけで、通常より三割り増し」

「何がです？」

笑いを抑えるような、慶太の声。

女は当然という顔で、ピツと指を立てる。

「カッコよさ！　ちなみにスーツは二割り増し、各々眼鏡があつたら+αがつくわね」

イタイ……イタイ女だったか――

「じゃあ、涼介を見てたわけじゃなかったんだねー」
修平が、空気も読まずさらっと俺を傷つける言葉を吐きやがった。
隣で慶太が、耐えられないように俯いて腹を抑えてくすくす笑つて
る。

「元はといえば、お前が――」

「リョウスケ？」

慶太に文句を言おうとした俺の言葉を、女が遮る。

じつと顔を見つめられて、柄にもなく動揺して目を反らしてしまう
自分が嫌だ。

それでもじつと顔を見ていた女は、しばらくしてぽつりと申し訳なさ
そうに呟いた。

「――ごめん。顔、見てなかった」

――沈黙

「ぶはははーっっ！」
「おねーさん、さいこーっ！！」

――の後の、嵐

「うるせえっ！ 笑うな！！」
腹を抱えて笑い転げる二人を足蹴にしながら怒鳴り散らす俺を、周りにいた数人の通行人も笑ってみて。

勘違いした俺も俺だけど！！
逆上して女を指差す。

「興味ないなら、じつと見んなよ！」
「興味はあるよ、制服に。それにきみ、眼鏡もしてるから、+α」
にっこりと笑うその女に、殺意を抱くのは俺だけか！！？

「せっせいふ……くーっ、眼鏡ーっっ」

慶太の、途切れ途切れの声に顔が真っ赤になっていく。

女は俺の不穏な空気を悟ったのか、少し慌てたように両手を振った。

「いやいや。三人の中で、一番制服姿が格好良いよ。それだけ着こなせるのは、さすがだよ！」

「そこかよっ！ フォローになってねえっ」
制服限定か！！

俺の突っ込みに、二人＋通行人の笑いがヒートアップ（涙

なんだこれ、羞恥プレイか、何かの罰ゲームか！？
それとも、昨日別れた女の呪いか！？

「いいっ！ おねーさん、もうホント、ステキすぎ……」
やっと笑いが治まってきたのか、慶太と修平が深呼吸を繰り返しながら立ち直ってきた。

「俺は、慶太くんです。おねーさんは？」
慶太があいていた女の横に腰を降ろして、まだ涙目の顔でにこりと笑う。

女は首を傾げながら、少し考えて口を開いた。

「莉子」

「りこ?」

反対隣に腰を降ろした修平が、ニコニコ笑いながらしゃべりかける。
さながらじゃれ付く、大型犬――

「莉子さん! 俺、修平くん! 莉子さんて学生?」

少し面食らったように修平の方に向くと、首を振った。

「うつん、社会人」

「え? でも、平日の昼間ですよ? どんな会社にお勤めなんです?
」

慶太の言葉に莉子は軽く握った右手を口元に当てて、考え込む。

「うーんと、簡単に言うと――大学院で教授の助手をしてる……っ
て感じかな」

「うわっ、頭いいんだ!」

修平の驚く声が、俺の頭を直撃する。

「頭いいくせに、イタイ女かよ」

「涼介、お前もちよっとイタイ奴になってるけど」

くすくすと手で口を隠して笑いを堪える慶太を、睨み付ける。

腕を前で組んでそっぽ向いている俺は、イタイ奴というよりは子供
っぽいかもしれない。

――自分の状況を把握したら、余計に恥ずかしさが倍増していたた
まれない

「莉子さん、制服好きなんだ」

「うん、制服姿がね。高校生に戻りたいわ」

両手を胸の前で組んで目をキラキラさせている莉子を、楽しそうに二人は見ている。

「じゃあ、俺達もカッコよさ三割り増し中？」

なんで嬉しそうに聞く、修平！

「普段を知らないからあれだけど、格好いいわよ。修平くん」
「ホント？」

だから、嬉しそうに尻尾振るな！

修平の後ろに、でかい尻尾が見える――

そっぽ向いてる俺の前で、楽しそうに談笑してるこいつ等が一纏めにムカついてきた。

「俺、先行くからな」

それだけ言い捨てると、踵を返して歩き出す。

「涼介？」

後ろで、慶太が怪訝そうな声を上げたのが聞こえたけれど、無視。

そのまま歩き去ろうとしていた俺の背に、慶太の声を追うように莉子の声が響く。

「あつ、あの！ ホント格好いいと思うから！」

一瞬立ち止まりかけた俺に、追い打ちな言葉。

「制服姿！」

「だから、そこかよ！」

思わず振り返って突っ込みを入れる自分に、呆れた拍手を送りたい
(涙)

そして続く、宇宙の果てまで走り去りたい、莉子の言葉。

「だから、落ち込んだじゃダメよ？」

落ち込む？ 何に！？

開いた口がふさがらないというか、あけてみたものの言葉が出てこ

ないというか。

視界に入った慶太と修平の、爆笑寸前の顔が感情を助長する。

「落ち込んでねえよ!!」

それだけ怒鳴ると、大爆笑が響くその場を駆け足で去った。

決定・1

逆切れといわれようが
自業自得といわれようが。

要するに、俺はプライドの生き物だということです

第二章 決定

「いやー、昨日はホント面白いもんが見れた。ね、修平」

俺の前の席に、振り返ってニヤニヤしている慶太。

「うん。女の人に対してあんなに怒鳴る涼介、初めて見た」
俺の机の横に立って、にこやかに笑う修平。

そーだろーよ。

女に対してあれだけ怒鳴ったの、初めてだったよ。
いつもはどうでもいいから、流すのに。

ってか、最初っから話なんて聞いてねえのに。

ちょっと罪悪感がわいてるんだから、つつくなよ。

両腕に頭を乗せて机に突っ伏したままの格好で、二人の会話を聞く。
頭を上げると、ムカつく笑顔がこっち見てんのが分かるから。

「でも、莉子さんっていい味出してたよね」

何を思い出しているのか、慶太はくすくすと笑いながら手に持ったパンを食べ始める。

「ホントホント、五歳も上なのに大人に見えないっていうか」
修平も笑ってる。

「信じられないよね、あれで二十三歳。外見詐欺でしょ」

外見詐欺ってなんだそれ、初めて聞いた言葉。

顔を上げずに、なんとなく脳内突っ込み。

「涼介放つといて、莉子さんと話して正解だったよね。
まったく意識されてない涼介の存在が面白かったけど」

そう。慶太がいう通り、こいつら先に帰った俺を追いかけてこなかった。

プライドずたぼろになった友達より、莉子を選びやがって。

「でも、涼介が落ち込んでないか心配してたじゃん」
修平の言葉に眉が、ぴくりと持ち上がる。

「心……心配？」

ゆつくりと頭を持ち上げると、案の定、おちよくるように笑う慶太と無邪気に笑う修平の顔。

「そ、心配。ちゃんと顔を見てあげればよかったわっ……てっ」

我慢できなくなったのか、慶太はそこで噴出して会話が中断。

「きつと怒って帰ったんだ、どうしようって、ずっと気にしてたよ。
涼介」

その後を修平が続けて、俺の神経を逆なでする。

「もっと、俺を貶めてねえか？ 莉子のやろう」
そっという時は、そつとしとくのが常套手段だろう！

慶太は笑いながら、視線だけ俺に向けた。

「なんだ、怒っててもちゃんと名前聞いてたんだ」

「目の前にいたから、聞こえたんだよ」

ぶっきらぼうに言い捨てると、食べ終わったパンの袋をビニール袋にしまいこみながら慶太がにやりと笑った。

「でもさ、いたじゃない」

何がしたいのか分からずに、首を傾げる。

「顔だけを見ない女の人」

「――」

俯き加減で、視線だけで慶太を睨む。

「制服だけ見てる奴のが、厄介だと思うけど？」

「あと、眼鏡も」

よけーな一言を割り込ませる修平を、睨みあげる。

「どっちにしろ、本体が眼中に入ってるねえ」

「あ、やっぱショックだったんだ」

慶太の一言って、ホンキでム力つく。

修平は裏がないけど、こいつは悪意込みで面白がっていつから。

「ショックじゃねえっての！」

「はいはい」

あしらいやがったっ

頭にきた勢いのまま怒鳴りつけようかと思ったら、慶太の携帯がメー
ールの着信を振動して知らせる。

タイミング悪っ！

仕方なく口を閉じて椅子の背もたれにもたれかかると、慶太はなんでもないように携帯を弄り始める。

「ねえ、もうすぐお昼終わっちゃうのに、宮下くんってばご飯食べないの？」

声のしたほうに顔を向けると、クラスの女子の姿。

恥ずかしそうに俯いてる木内と、少しやかましい佐野。

「――別に。なんか、面倒だし」

「えーっ、昼ごはんが？ 食べなきゃだめでしょ、若者が」

きゃんきゃんうるさいな。

しかめっ面で佐野を見上げたら、一瞬口をつぐんで視線を修平に動かされた。

「そう思わない？ 高坂くん」

俺達の会話を面白そうに聞いていた修平は、佐野の言葉にそうだねえと呟く。

「でも、涼介。今日なんも持ってきてないんだろー？」

修平の間の抜けた声に、なんか今は癒される。

いつもは嫌だけど。

「じゃ、これ食べなよ。ほら、きーちゃん」

佐野が待ってましたとばかりに、隣で俯いている木内の背中を軽く叩く。

そーいうことねー

促された木内は、小さな声で何か言いながら菓子パンを二つ俺の机に置いた。
何言ってるのかわからん。

が。

俺の周りにいる女は、こういう感じ。

よく言えば大人しくて可愛らしい、悪く言えば自己主張がない女。

よく言えば明るくて楽しい、悪く言えばおせっかいでうるさい女。

とにかく近くにいる奴からは、大体クラスメイト以上の好意を向けられる。

こっちがうんざりしてても。

だから、勘違いしたんだよ

——ごめん。顔、見てなかった

莉子の声が、頭の中に響く。

思考がどうしても莉子に繋がるのは、ズタボロにされた俺のプライドの所為だろう。

パンを見ながら黙っていたら、木内が何か勘違いしたのかみるみる真っ赤になって俯いていた顔をもっと下に向けた。それを見た佐野が、またきゅんきゅん言い始める。

「お礼くらい言いなさいよ、宮下くん。何、黙ってるの？」
「んあ？」

思考が引き戻されて、間抜けな声が口から零れた。
見上げた先の佐野の顔が、少し赤く染まる。

あ、怒ったのか？

首を傾げると、この雰囲気はどうにかしようと考えたのか、明るい
声で修平が余計なことをあっさりと口にした。

「涼介、莉子さんのこと考えてたんだろー」

あはは、と笑いつきで。

「は？」

思わず、ぐりんつと修平を見上げる。

信じられないような目をしていたのは、俺だけじゃなかったようだ。

「——あんだ、もう他の子と付き合い始めたの？　さいてー」

横から聞こえる、不穏な声。

「行こ、きーちゃん」

振り向くと同時に見えたのは、木内が机に置いたパンを右手に、木内の手を左手で掴んで歩き去る佐野の後姿だった。

修平は何が起きたの？　みたいな顔をして、首を傾げてる。

「また、涼介の評判落ちたね」

それまで黙っていた慶太が、携帯を閉じながらにこやかに笑った。

「……それ、笑って言うことか？」

「え？　俺、まずいこと言った？」

慶太と二人で、修平を見上げる。

「それわかんないお前に、彼女は絶対できない」

無邪気はある意味、最高に最悪だ。

しゅんと肩を落としている修平はとりあえず放っておいて（なぜなら傷ついたのは俺の方なはずだから）、確かに腹減ってきたな……と鞆をあさって見つけたのだと飴を口の中に放り込む。
糖分とつときゃ、もつだろ。帰りまでには。

もぐもぐと飴をなめてたら、慶太が修平を見上げて手のひらを下に向けて振る。

「ちよいちよい、修平」

怒られたと思っていた修平は、見る間に笑顔になって机の横にしゃがんだ。

「なにになに」

うーん、単純。

二人の姿をぼーっと見ていたら、慶太の口から信じられない言葉が飛び出した。

「莉子さん、明日十一時に正門前だつて」
「あ、ホント？」

思考停止

固まっている俺の目の前で、二人の会話は進んでいく。

「土曜だから学生も少ないし、時間取れるみたい」

「へー、じゃあ学食で昼食べてみたいなあ」

——え？ 莉子？

目を見開いて二人を見ていた俺に、慶太が気付く。

「涼介もいく？ 莉子さんの職場」

「は？」

驚いて、それしか答えられなかった。

「涼介帰ってから結構話してさ、メアド交換したんだよね。だいぶ

強要したけど。さっきメールしたら、返事くれたんだ」

「……お前等、ナンパしたんか」

「だって、ステキなんだもん。莉子さん」

そのステキは、恋愛感情抜きで腹黒いステキだろう。

思い出し笑いを浮かべながら、どうする？ と、首を少し傾げる。

「——行く」

にやりと、慶太に笑いかける。

「人のプライドぎたぎたにしやがって……。あの女、落として振ってやる」

「うーわー、自己中降臨だよ。さいってーね、涼介ってば。悪だ悪」
「いいながら、すげえ楽しそうなんですけど？」

ぜってえこいつ、俺がこういうと思ってメアド交換しやがったな。

なんとなく手のひらで転がされている気もしないが、それ以上に俺は自分のプライドを修復する気満々だ！

「涼介、莉子さん苛めたらかわいそうだよ。やめなよー」

机にあごをのせて心配そうに俺を見上げる修平を、目を細めて見る。
「うるせえよ、修平。俺は俺のプライドの方が大事」

修平は眉をハの字にまげて、納得いかないような表情で俺を見返す。

慶太はそんな修平の頭を軽く叩きながら、仕方ないよ、と溜息をついた。

「顔しか取り柄がないのに、その顔を見てもらえずに制服にしか興味もたれなかったんだから。ホント顔だけなのに、それを凌駕した制服」

あ、眼鏡もね、と呟くと笑いがよみがえってきたのか、おかしそうに肩を震わせてる。

「ま、向こうを落とす前に涼介が落ちないようにね。あー、受験ストレス解消の楽しみができた」

「落ちるか！ あんな小動物に！」

かみつかんばかりに慶太を睨み付けたら、修平の言葉が、一気に緊張感をぶった切ってくれました。

「じゃあ、涼介は小動物にプライドをぎたぎたにされたんだね」

——座っているのいいことに、かかと落としをかましていいですか？

略取・1

持っていかれたモノ

それは、持っていかれたことさえ
少しも気付けない“モノ”でした

——後日談

第三章 略取

翌日十一時。

莉子に指定された時間に、俺たち三人はとある大学の正門前にいた。

——って

「ここ、俺の通う大学じゃねえか！」

呆然と中の建物を見上げる俺の横で、慶太と修平は、さも当然のよう
に頷いた。

「この大学院で、研究生をしつつ教授の助手をしてるそうだよ」

へー、そっかー（にっこり

「じゃなくて！ 言えよ、そういうことは昨日のうちに！」

思わず突っ込むと、慶太は首を傾げる。

「別に言おうと言っまいと、来るんだからいいじゃない。あ、いた。莉子さん」

その声に、正門に向かってくる小さい生き物……基、莉子の姿が目に映る。

「あれ？」

思わず声がでた。

あの時は垂らしていた肩より長い髪を、クリップで上げていて。

セーターから出ている、ジーンズに包まれた華奢な足。

走ったせいで白い肌を少し赤く染めて、白衣を翻しながら駆けてくる。

制服フェチのくせして――

ていうか、ちゃんと見たら、結構かわいい系じゃね？

あの時は、前の彼女とかイラツキとか全て八つ当たり等に等しくこいつにあててたから、顔をあまり見てなかった。

あれー……俺って、こいつに文句言える立場じゃなかった……かも？

思わずじっとみていたら、慶太がニヤニヤしているのに気付いて目を反らす。

「ごめんごめん、遅れちゃった」
綺麗なソプラノ。

なんか、外見詐欺の意味が分かった気がする。
全然、高校生でもいけるんじゃないの？ こいつ。

「いいえ、こちらこそわがまま言ってますみません」
「……」

慶太は、大人受け絶対いいと思う。
にこやかに対応する姿を見て、生徒会侮りがたしとか考えてみる。

「えーと、慶太さんと修平さんと……涼介くん？」
カチーン

「なぜ、俺だけ間が空く。そして何ゆえ疑問系？」

俺の言葉に、目をパチパチさせて動きが止まる。
なんか、意図せず苛めた感じ？

内心、居心地悪く溜息をつく。

突っ込まずにいれない、この性分をどうにかしてえ――

莉子を見下ろすと、にこーっと笑みを浮かべられた。

「うっん、ちょっと驚いちゃって。よかった来てくれて、すごい嬉しい」

「え？」

本当に嬉しそうに笑うから。
なんだかちよつと、ドキッとしてしまったのは、きっと俺の霍乱だ
ろう（なんだそりゃ

少し莉子に対するイライラが収まろうとしていたその時、

「いやー、あれだけ怒らせたから今日は来ないかもって思ってた。

あー、安心したー」

だから、そっちかよ——

……再び、増大しました。

莉子はこっちの気持ちに少しも気付かず、慶太がもうそろそろ爆笑しそうなにも気付かず、少しバツが悪そうに頭に手をやって俺を見上げた。

「ごめんね、あの時は考えなしの発言しちゃって。や、言われて見れば格好いい子だね。だから機嫌直して、ね？」

「言われて見れば……ねえ」

「あー……」

俺の言葉にまた失敗したか、と顔を歪めて視線を彷徨わせる莉子にやっぱりイラつきがつる。

この小動物め――

嫌味を言いたい気持ちが強いけれど、頑張って飲み込む。

「別にいいよ。莉子こそ、仕事大丈夫なのかよ」

俺の言葉に、少し目を見開く莉子の表情を盗み見るように観察する。

経験上、ほぼ初対面の女に対しては。

少し砕けた口調。

一応これも誇れる、低音ボイス（こーいうとき以外、あんまつかわねーけど）

で、止めの最上級笑顔。

これで落ちなかった女はいない。

ほれほれ少しは赤くなれ、そして意識しろ。さっさと突き放してやる。

俺がお前に言われた言葉以上に、ぐっさりとする言葉で。

でも、俺の価値観とずれている彼女は、返答もずれてました。

「——莉子さん」

彼女はピッと右の人差し指を立てて、俺を見上げながら自分の名前を告げる。

「はい？」

思っても見なかった態度と内容に、アホ面な声がでた。

莉子は左の手を腰に置き少し背を反らせて、右の人差し指を突きつ

ける。

「涼介くんはいくつ？」

へ？ 歳？

「じ……十八」

ぱちぱちと幾度も瞬きをしながら、答える。

「私は二十三歳の年上です。慶太くんも修平くんもちゃんと莉子さんって呼んでくれてるのに。り・こ・さ・ん。……ね？」

小さい子に言い含めるように、ゆっくりと自分の名前を俺に告げる。

「——莉子……さん」

勢いというか呆然として何も考えられていないというか、とにかく雰囲気そのまま口に出す。

すると納得したのか少し尖らせていた口を戻して、にっこりと笑った。

「そ、いい子だね、涼介くん。さて、お昼食べてきてる？」

「——いえ……」

「食べてないです！ 学食行ってみたい！」

俺の言葉に被せるように、修平が手を上げて叫ぶ。

莉子はくるっと修平の方を向いて、学食の話をしながら歩き出した。

「全然意識されないねー、見ていて清々しいくらい」

呆けていた俺は、いつの間にか横に慶太が立っていたことに気づかなかった。

少し驚いて、肩を震わす。

その肩をぽんと叩かれて、足が前に動いた。

「ほら、莉子さんたちいっちゃうよ。昼飯抜きになっちゃう」

惰性のまま足を動かして、莉子たちの後ろをついていく。

何も言わない俺を見ながら、くすくすと小さく笑う慶太は少し覗き込むように俺を見る。

「初めてなんじゃない？　こんな反応。涼介の仕掛け、すべてスルーしてくれたね。彼女」

仕掛けたもの。

それは、口調に声音に笑顔のことですね。

「――追い討ちかけんな」

ぼーっとしながら、前に行く莉子と修平の後姿を見る。

百八十を超える修平と、百五十あるかないかの莉子。

大人と子供、見た目は反対。

莉子が話しやすいように身体を屈ませて歩く修平は、とても楽しそうに笑っていて。

少しでも修平の声が聞こえやすいようにと、首を反らせて見上げる莉子も楽しそうに笑ってる。

「あれえ？　もしかして、涼介。……ホントに落ちた？」
隣を歩く慶太が、莉子たちに視線を固定してる俺を見て、意地悪そうに笑みを浮かべた。

落ちた？

ああ、俺が？

「落ちたというか……。俺、昨日さ。お前に女に対して執着ねえって言ったけど、前言撤回するわ。今出来た、執着したい女」
少し驚いた顔をして、口を開く。

「え？　もしかして莉子さんに、一目惚れ？　マジで？」

その言葉に、慶太を見る。

「ゲームのラスボス倒す気分」

「は？」

口に出した途端、わくわくした気持ちが湧き上がってくる。

「俺に興味をもたねえ女、初めて。あいつ、絶対攻略してやる」

「攻略って……、相手は生身の人間なんだけど」
呆れた口調の慶太の言葉なんて、耳に入ってこない。

視線の先は、前を歩く二人の姿だけ。

「ねえ、君たちは何が食べたい？ 洋食系なら新食堂、和食なら旧食堂、軽食なら喫茶室」

修平と一緒に振り返って、思い出すように左の人差し指を口に軽く当てて考えながら俺達に告げる、莉子の姿。

だって、マジで初めてなんだよ。

ここまで俺に興味持たない奴。

俺のココロ。

なんか、新しいゲーム始める時のあんな感じ。

今まさに、電源ボタン、入れる瞬間。

「莉子さん。俺、洋食が食べたい」

俺の声に莉子さんは当てていた指を口元からはずし、慶太と修平にも了解をとる。

そのままにこりと笑うと、あさつての方向に歩き出そうとした修平の上着の袖を、くんつと、その小さな手で掴んだ。

「こつち、ね？」

見上げて笑うその顔に、修平が嬉しそうに笑い返す。

ドクンッ

——え？

一瞬、心臓が、音を出した。

「——え？」

意味が分からず、自分の胸元に視線を移す。

左手で着ていたシャツを掴むと、慶太に背中を少し強めに叩かれて振り向く。

「ほら、行こう」

「——ああ」

視線を莉子に戻すと、彼女の手はまだ修平の袖を掴んでいて。

「……」

思わず、足が動いた。

大股で二人の傍まで歩いていくと、莉子の左手を掴みあげる。

「え？」

びつくりして俺を見上げるその顔を、なんだか右手で一掴みしたくなってくるな。

にやり、と笑ってさっさと歩き出す。

「え？　ちよっ……ちよっ」と

まだ修平の袖を掴んでいた手が、俺が引つ張る勢いで外れた。

なんか、すつきり

「食堂はどこ？ 俺、腹減ったよ。莉子さん」

俺に合わせるようにどこか焦って歩いていた莉さんが、顔を上げて俺に掴まれたままの手を少し引く張る。

「ちよつと涼介くんっ、歩くの速いつ！ そんなに急がなくても食堂は消えないからっ」

——だから、そこかよ。少しは意識しろよ。
男に手えつながらてんだから。

突っ込みたいのはやまやまだけど。

何もいわずに、ぐいぐい引く張っていく。

莉子の隣に、修平と慶太が歩いていて。

にやにや笑いの慶太と、莉子を少し心配そうに見ている修平。
ってか、修平。お前のその視線、気に入くわねえ

「涼介くんてばっ」

一向に離されない手にやきもきしてきたのか、莉子が少し大きめの声で俺を呼ぶ。

俺はにこにここと笑いながら、「両手に花だ」と修平たちを見る。

「ね、莉子さん？」

莉子さんは複雑な表情を浮かべて、首を傾げた。

「そういうなら、女の子でしょ？」

「えー、でも莉子さんがもし二人いて両隣に立たれていても、なんか――両手に……ハムスター？」

「何それっ」

ショックを受けたかのようなその表情に、俺は手を掴んだまま大爆笑で応えてみた。

疑問・1

なんで 考えているのと真逆にしか

この“小動物”は動かないんだろう

第四章 疑問

学食で昼飯をとった後、事務所で高校の生徒手帳を提示して見学の許可を貰う。

慶太たちは、大学受験の為の見学がしたい、という理由で莉子と会う約束をしたらしい。

「大学受験の為なのに、院を見たいの？」

莉子の職場を見たいと開口一番、慶太が提案した。

それに少し不思議そうな表情をしていたけれど、慶太の押しに首を傾げながら研究棟へと俺達を案内してくれた。

「ここは、文系の研究室が集まってる場所なんだけど。ホントに興味あるの？」

「文系っていうと、文学部の？」

思わずぽかんと口を開けて、研究棟を見上げる。

「そう、文学部の。大まかには法学・人文学・文理学・文学がこの棟には入ってるの。どうぞ、こっち」

正面にあるガラス扉を押し開けて、中に入る。

入った途端、何か特有なにおいがして首を傾げる。

——少し、埃っぽい感じがするのはなぜだろう。

鼻をひくひくさせながら歩いていたら、隣を歩く莉子に笑われた。

「埃臭い？ それとも、湿気？」

眉を顰めながら、小さく唸る。

「埃……かな」

「文学棟だけあって書物っていうか、紙媒体の資料がたくさんあるからね」

白衣のポケットに両手をつっ込みながら、莉子は颯爽と歩いていく。
なんだろう。

この建物に入ってから、少し彼女の雰囲気が変わったように思える。

すたすたと歩いて最上階廊下の一番奥。

日本古典文学研究室、と仰々しい名前が掲げられたドアの前で足を止めた。

「教授、戻ってますかー？」

ノックをした瞬間に、返事も聞かずにドアを開けて中に入っていく。

って、おい。

どうぞとか、目線だけでも促すとか、なんかしろっ
さかさか入っていくなよ。

思わず後ろから歩いてきていた慶太と修平を振り返って、いいの
な、と首を傾げてみた。

さすがの俺でも、こんな所入るの勇氣いるんですけどー

修平もどうしたらいいのかわからないようで、首を伸ばしてドアか
ら部屋の中を伺う。

慶太は何の躊躇もなく、俺の横をすり抜けて中に入ってしまった。

さすがだ――

「失礼します」

そして一声かけるのは、忘れずに。

修平と目を見合わせて、ゆっくりとドアの中へと歩き出す。

部屋の中はスチール棚で真ん中を区切られていて、その向こう側に廻ると高校の職員室にあるような、スチール製のデスクが四つ向かい合わせの島になっている。

そして窓際に、こちらに向いたデスクが一つ。

全てのデスクには書類のような資料のようなものが積みあがっていて、ノートパソコンが置いてあった。

初めて見る“研究室”の中は、一言で表すと――雑然――だと思う。

窓際のデスクに、四十代位の男が椅子に座ってこっちを見ていた。

「君たちが、見学に来た高校生かい？」

「……はい……」

三人勢ぞろいで返事をする、面白そうに男が笑う。

「三島が若い子連れてくるって言うからどんなのかと思ったら、想像以上」

「想像以上？」

莉子が寄りかかっていた窓枠から、少し身を起こす。

男はにやりと笑うと、俺たちを指差した。

「想像以上に、三島がメンクイということが分かった」

「教授！」

莉子が顔を少し赤くさせながら、教授と呼ばれた男の腕を叩く。

その男は立ち上がって、莉子の頭に腕を置いた。

よりするに、肘置き。

ちよつと、内心むかつとくるのは仕方ないと思います。
なぜなら莉子は、俺のターゲットだから。

莉子は嫌そうに身を引いて男の肘を頭から落とすと、片手を振って男を退かす。

「このふざけた人が、この研究室を担当している山口教授。若作りだけど、これでも四十五歳」

「三島あ、お前、単位いらないんだな？」

「それとこれとは別口です」

言い捨てて、俺たちの方に向き直る。

「さてと。何か、飲む？ 教授の珈琲とか教授の紅茶とか教授のジュースとか勝手に取っていいわよ、そこから」

人差し指で俺たちの後ろにある小さな冷蔵庫を指し示すと、私は紅茶とにつこりと笑う。

「教授って呼ぶ割には、俺を大分軽く見てるよな。俺に憧れてこの研究室に来たんじゃなかったかね、三島莉子くん」

「そうなの？ 莉子さん」

同じく取り出した珈琲をその長い手で教授に渡しながら、修平が首を傾げて莉子を見る。

慶太が取り出した冷えた紅茶のペットボトルを受け取りながら、莉子は自嘲気味に肩を竦めた。

「まさか高校から憧れていた研究生が、こんな人だったとは。私の青春、返して欲しいくらいですよ」

紅茶を飲んで、一息つく。

ついでに溜息もつきながら、横目で教授に視線を向けた。

「私が高校の時、教授が発表した論文読んで憧れて。そのあとうちの高校に講演に来たこともあって余計にね。頑張って院に入ってみたら人的には憧れられない教授でした」

「山口教授が目標なんです！　なんて、目を輝かせていたのはいつの話か……」

教授が遠い目をして、窓の外に視線を移す。

「白亜紀より前なんじゃないですか」

「こんな可愛くない三島の、どこ見ておまえ等ナンパしたの？」

「されてないから！」

なんだか、本当に仲のおよろしいことで。

慶太はくすくすと押し殺した笑い声を零しながら、にこりと笑って教授を見た。

「だって、年上なのに可愛らしいじゃないですか。突っ込みどころ満載で」

「どっちも褒め言葉じゃないし！」

笑い声を上げながら、教授と莉子が慶太に突っ込む。

——ていうか、なんで俺って実況中継みたいなことしてんの
もうわかったよ、教授と莉子は仲がいいんだってことは

「莉子さん。置いてある資料とかって、見てもいいの？」

教授と話していた莉子に声を掛けながら、その小さな肩を人差し指でつつく。

莉子は少し驚いたように目をぱちくりさせながら、俺のほうに振り

返った。

「え？ 資料って……どの？ 興味あるの？」

「え？ うん」

あまりにも驚かれたので、意味もなく驚き返す。

素直に頷いた俺に、もっと驚いた声を上げたのは後ろの教授。

「あれ、ホントにうちに興味あったんだ。三島目当てかと思ってた」
八割方、当たってます。

少し目を細めて、莉子さんを見下ろす。

口元にだけ笑みを浮かべて、“いい顔”を作り上げる。

「本は好きです、でも莉子さん目当てで来たのもありますよ」

「……」

戻っていた目が、またくりくりと大きくなって俺を見上げた。

「ひゅー、やるじゃん三島」

ふざけてる教授は、この際無視。

ここまで言えば、莉子も少しは俺を意識するだろう。

ぱちぱちとまた瞬きをしていた莉子は、ちょいちょいと右手で俺を呼ぶ。

身長差があるから、声が良く聞こえないのか？ なんて、素直したがって屈んだ俺。

その途端、莉子の右手が俺の頭にのった。

「かわいいなー、涼介くん！ 昨日の事を気にして、今日来てくれたの？ 大丈夫よー、私怖がってないから！ ていうか、目の保養をさせてもらったし！」

——は？

動きの止まった俺。

「目の保養？」

教授の問い。

「そう！ 学ランにプラスα！ しかも、不機嫌そうな顔！！ 垂涎ものの光景だった！」

「プラスα？」

「眼鏡！ これはもう、見とかなきゃ損って感じで」

「やっぱりそういうことかー！！」

笑い声と共に、研究室の入り口からどやどやと人が入ってきた。

「は？」

思わず、間抜けな声が出る。

莉子は俺の頭に手を乗せたまま、声のした方に顔を向けた。

「あれ、皆してどうしたの？ 確か、大学の資料室に行ってたんじゃない……」

「莉子が連れてくるって言ってた高校生見るために、戻って来たに決まってるじゃない」

そう言いながら、集団から離れて気の強そうな女がこっちに歩いてきた。

莉子と同じ白衣を着て、そのポケットに両手をつ突っ込んでる。

「あんたがその子？ 私、坂口 唯。莉子の同期よ」

「……はあ……」

俺の口から出たのは、もう、なんていうか呆気にとられたとしか言えない声。

その女……えーと、坂口？ は、ニヤリと笑って俺を見上げた。

「莉子が男連れてくるって言うから、騙されてんじゃないかって思ったけど……。いー感じに、手なづけてんじゃないの」

手なづけ……？

はたと、自分の格好を振り返る。

身体を屈めて、莉子に頭を撫でられています……

「……」

とりあえず笑顔を貼り付けたまま、上体を戻してみました。

莉子は不思議そうな表情を浮かべながら、届かなくなった俺の頭から手を外した。

その視線をばんばん感じながら、内心苦い気分になる。

手なづけられたいんじゃないかって、こいつを手なづけたいんだけど。

薄く笑みを浮かべて、坂口を見る。

「宮下 涼介です。別に俺、手なづけられてるわけじゃ……」

「ね、可愛いでしょっ！」

俺の声を遮ったのは、莉子の嬉々とした声。

……可愛い……？

口元を軽く上げたまま莉子に視線を移すと、声と同じくらい嬉々と

した表情で両手を握って力説始めました。

「昨日は怖いな〜って確かに思ってたんだけど！ 私を怖がらせたからって、わざわざ謝りに来てくれたんだよ！」

オイ、なんだその曲解はっ！？

「え、莉子？」

思わず口走った声に、莉子がむんつと俺の目の前に人差し指を立てる。

それにびくつとしながら瞬きを繰り返すと、莉子は上目遣いに俺を睨む。

「私の名前は？」

はつきり言って上目遣いの表情の方に意識がいつてて、莉子に言われた事を理解するのに数秒掛かりました。

……莉子マジック……

くそ、小動物の癖に人間を翻弄しやがって。
小さく息を吐いて落ち着いてから、口を開く。

「……莉子さん」

俺の言葉に満足そうに頷く莉子さん。
それを見て、坂口が思いつきり噴出した。

「ぎゃはははははっ」

女とは思えない、笑い声で。

「ちょっと、唯！　なんで笑うのよー！」

一応、馬鹿にされているのは分かるのか。

「涼介くんが可哀想でしょ!？」

……そっちかよ。そっちの方が、可哀想だよ俺。

知らず肩を落とした俺の事を、坂口も笑ってるけどその後ろのほうで慶太たちも笑ってるのが見えて、余計がつくり。

坂口はひとしきり笑った後、苦しそうにお腹を押さえながら莉子の頭をがつつと掴んで後ろに追いやった。

「何すんのよ、唯っ」

非難がましいその声に、あんたこそ何言ってるのよ、と聞こえないように呟きながら手のひらを振って慶太達の方に追い払うと俺の肩を掴んで押してくる。

「え？」

いつの間にか椅子に座っていた教授の横に立たされるような形で、窓際に押しやられていた。

坂口は教授の机に身体をもたせ掛けると、腕組みしながら俺を見上げる。

「こらこら、坂口くん。この机は、君の椅子じゃないぞー」

ずっと成り行きを傍観していたらう教授は、咎める様な言葉を使いながらも楽しそう。

「ミヤシタリヨウスケくん。君、ここに何しに来たの？」

「へ？」

もー、俺ってばさっきから単語しか口にしてない気がする。

「何って、大学の見学にですけど」

慶太達がね。っていうか、慶太がね。

俺、大学決まってるし。

「ふうん？」

坂口はにやりと、口端を上げる。

なんとなく、本能でこの女やばいと思ったその瞬間――

「入学が決まってる大学、わざわざ見学しに来るんだー？」

「……っ」

――爆弾は落とされた

驚いて何も言う事が出来ない俺を、にやにや顔の坂口は面白そうに見ている。

隣で教授が首を傾げた。

「なんでそんな事、知ってるの？ 坂口くんは」

「それは私が、推薦入試の手伝いをしたから。人気者は大変ねえ、あんたを見かけた学生が教えてくれたわよー。その子の出身校で有名な、宮下 涼介だって」

……有名……

何が有名かというのは、聞かなくても分かる。そんな自分が、切ない。

いや、半分は自業自得なんすけど↑自棄

「へえ、有名？」

食いつく、山口教授をつい目を細めて見下ろす。

それに気付いた教授は、くすくすと笑いながら肩を竦めた。

「なるほどねえ、そーいう“有名”ねえ」

坂口と同じ様に腕を組みながら、俺を見上げてくる。

——こいつら、兄妹かよっ

表情には出さず視線だけ固定して睨みつけると、坂口はにやにや笑ったまま手のひらを上に右手を俺の前に差し出した。

「……？ 何？」

「口止め料」

……

「高校生から、金取るわけ？」

「あら、なんだか慣れた風ね。ただの優男じゃないってことかしら馬鹿にした口調に、思いつき目を眇める。」

「優男って、イマドキ言わないですよ。坂口さん」

ぴくって、眉が動いたのを見逃さない。

「別に、お金なんて欲しくないわよ。あんたの高校、来週……」

「はい、どーぞ」

見た目だけは談笑しているような俺たちの間に、慶太の手が割り込んできてぴらっと一枚坂口の手のひらに何かを載せた。

それは、来週ある予定のうちの高校の学祭のチケット。

これがないと、入れない。

「なんでそんなもの、持ってたんだよ。しかも、その枚数」
差し出している右手に、一枚。

下ろしている左手に、少なくとも十枚以上。

慶太はなんでもないように、爽やかに笑う。

「ふふ、元生徒会のコネ。それにお金を落としてくれる人は、たくさんいた方がいいでしょ？」

途中から小声で俺に伝えたと、坂口に向き直って微笑む。

「これでしょ？ お姉さん」

にこやか爽やかな慶太の笑顔に、坂口は反射的に笑い返した。

「あら、物分りのいい子がいるわねえ。私は、リヨウスケくんよりこっちの子の方が好みだわー」

うーん、なんか流石な切り替え。

慶太はにこにこ笑いながら、口端を上げた。

「もともと皆さんに配ろうと思ってたんで。それに……」

坂口の耳元に口を寄せて、にやりと笑う。

「おねーさん、俺と同じ匂いがするから。……面白そう」

慶太の言葉に一瞬表情が固まった坂口は、すぐに口端を上げた。

「同感」

二人の視線は俺に向けられる。

……黒い……、なんか笑みが黒いよこいつ等

「大丈夫よー、ちゃんと莉子を連れて行つてあげるから」

指先で学祭のチケットをひらひらさせながら、声を落とした。

「ただ、莉子を泣かせたら承知しないからね……？」

くすくす笑いの坂口に何も答えないまま見返していたら、横から腕が伸びてきた。

「おい、慶太くんとやら。俺にもチケット頂戴」

それはこの場の空気を読むどころか、破壊している教授の声で。

慶太はその手にチケットを渡しながら、どうぞ、とにこやかに笑った。

教授はそれを受け取りながら、俺を見上げる。

「三島を泣かせたら、俺も承知しないからな？」

「教授……」

教授の言葉に一番反応したのは、坂口で。

「一応、腐つても教授だったんですね」

「だって、女子高生とお知り合いになれるチャンスなんて、なかなかないぜー？」

一瞬の沈黙の後。

「そっちの方が、教授らしい」

にやりと笑いあう、教授と坂口の姿があった。

「ほくら涼介、いい加減機嫌直さないと、莉子さん来ちゃうよ?」

「あー? 別に関係ないね。莉子が来ようと来まいと」

適当に返事をしながら、自分の格好を見ないように視線を天井に向ける。

そんな俺の態度に、慶太はにつこりと満面の笑みを浮かべた。

「興味ないからって、クラスの手伝いをしなかった罰だよ」

その言葉に、おもいきし溜息をついた。

莉子の大学にいったのは、もう先週の話。

今日から三日間、うちの高校は学祭に突入した。

中学と違って模擬店も出るし、結構好きな事できるし楽しみにしている奴等が多い。

俺も、何気に楽しみにしていたさ。

授業がねえんだから。

適当にクラスの手伝いをして、適当にサボればいいと思ってたんだよ。

伏せた視線に、制服じゃない服が映る。

——なのにつ

「何で俺がこんな格好しなきゃなんねんだよっ！ 何これ、なんかの罰ゲーム？ 復讐？ こんな男子高生おかしいだろ？ いないだろ？ いるなら目の前に連れて来い！」

一気にまくし立てると、場違いな声が慶太の後ろから聞こえてきた。

「どうしたの、涼介。女子が呼んでるよー。せめて、椅子に座ってるって」

「ほら、いた」

ひょこつと顔を出した修平を親指で慶太が指差す。

「……うちのクラス以外だよ」

がつくりと、肩を落として溜息をついた。

うちのクラスの出し物は、いわゆるカフェ。

そんなおしゃれなもんじゃないのは、裏でペットボトルやら菓子の袋が飛び交っている事で分かるが。

その、店員？ の格好が、癖もんなんだよ！

「どこの世界に、こんなめちゃくちゃなコスプレ喫茶があるってんだっ」

そう。

皆さん、思い思いのコスプレをなさっておられます……って、おかしいだろ！

聞いてたさ、俺だつて。

なんかそんなことするくらいは。

でも

——宮下くん、準備は手伝わなくていいわよ。当日、出来たものを着てくれれば。大丈夫、変なものは用意しないって

なんてクラスの女子が言ってたから、安心してたのに。

ナニコレ

着せられた後の俺が鏡を見て言ったのは、この単語。

制服ってか、これ、着物じゃなか！

武士だよ、武士！

刀まであるよ！

「おかしいだろ？ 何でカフェってネーミングで着物？」

向こうの鏡に映るそれは、着物を着た自分の姿。

なんていうの？ おかしいって言うか、着慣れないから恥ずかしす

ぎる。

しかも、なんか足がすーすーするしっ。

慶太は牧師の格好をした自分を見ながら、小さく首を傾げた。

「別に涼介の格好、おかしくないよ？ 俺も、結構似合ってると思うんだけどー」

「洋装の方が、俺もいい」

ぶすつと、呟く。

クラスの女子らの、俺を見たときの反応がくそむかついた。

でっかい声で、「ギャップ萌えー！ーっ！！」と、きたもんだ。髪の色がかったつから、着物、おかしいって言いたいんだろ！地毛なんだよ、これでも地毛なんだ！

こういう機会じゃなけりや着てみたいけど、ナニコレ、見世物？

「しかも、何で和装が俺だけなんだよ」

皆、種類は違えど洋装なのに。

俺だけ、袴。

修平は俺の前に立ったまま、慶太と同じ様に首を傾げる。

「そりゃ、涼介を目立たせてお客さん引き込もうとしてるんだから、しかたないよー。格好いいよ？ 涼介って、何着ても似合うね」

そんな修平は背が高いからか、さまになってる執事のコスプレ。

「嬉しくねえっ！ なら、修平の着てる奴よこせ！ それなら、制

服に似てる！」

思いつきり襟首掴んで引き寄せると、修平は困ったように瞬きを繰り返す。

「でも、涼介が着たらだぼだぼだよ？」

「何気に身長差、自慢すんじゃないっ！」

百八十超えてる修平と比べられたら、当たり前前に負けだっつーの！

いきまく俺を生暖かい眼で見ていた慶太が、修平を見上げた。

「修平、面倒だから力づく。引っ立てて」

「あ？！」

「了解」

叫ぶ俺と、のほほんとした修平と。

途端、修平に腕をとられて立ち上がられる。

「おいつ、修平っ」

引きずられて歩き出しながら、腕を振り払おうにも叶わない。

のほほんとしているけれど、バスケのために身体を作ってるのは知ってる。

そんな筋肉、こんなとこで使わなくていいんだってのっ！

隣で慶太が後ろで両手を組んで俺の刀を持ちながら、楽しそうに歩いてくる。

「諦めてよ、涼介。来場者アンケートで一位になったら、学食の割引券獲得なんだから」

「やっぱ、それかよっ」

引つ張つてもはずせない修平の力に諦めてついていくことにして、慶太を睨みつけた。

「当たり前じゃない、クラス分、一人千円山分け。三日分の昼飯が助かるもんね」

うちの学祭、いろんな賞があるんだけど、一番でかい商品がこれ。来場者に配られるパンフにある投票券。

それで一番いいと思ったクラスに、投票できるのだ。

その一位の商品が、三万円の学食券。

俺も欲しいよ、そりゃあよ。

「だからといって、俺がこんな目にあう筋合いはないっ！」

「あ、来た来たー」

慶太に文句を言つてたら、いつの間にかクラスに戻っていたらしい。そこは、カフェといいはる女子達が作り上げた、カフェというにはいささかチープな教室。

その窓際にある椅子に、修平の手にぐいっとひかれて座らされた。

「勝手にいなくななんないでよね、性格悪くても顔はいいんだから」

学祭委員の女子が、俺の目の前に立ってぶーぶー文句を言い始める。そんなこいつも、いわゆるメイドのコスプレ。

「うるせえな、お前がその格好したかっただけだろ」

図星を故意にさしてやると、だから何？、とふんぞり返りやがった。

「こんな時じゃなきゃ着れないんだから、別にいいじゃない。何も手伝わなかったんだから、せいぜいそこで愛想振りまいてよね」

「——無理」

「でも、やれ」

にやりと口端をあげると、そのまま入ってきた客に向けて歩いていった。

「誰だよ、あんなのに学祭委員させたの」
慶太、そっくり。

隣に座った慶太に顔を向けると、にこにこ笑いながら目を細めた。

「いい加減観念してよ、涼介。あんまりうるさいと、……キレるよ」
――」

笑顔のまま、冷気を醸し出せるこいつに勝てる気はありません。

大きく諦めの息を吐いて、腕を組んだまま天井を見上げた。

少しの我慢だ。

確か、今日は午前中だけいればよかったはず。

明日も明後日もいなきゃいけない時間はあったけど、とりあえず、今日が早く終わる事だけを願おう。

そう、思ったけれど。

「宮下くんだけ、着物だーっ。ちょっ、似あわなそうで似合っーっ」

……どっちだよ

「写真は？ 禁止？ えー、いーじゃん撮らせてよー」

……ふざけんな

聞きたくない自分への声が、いちいち癪に障ってむかついてくる。

「慶太くん、可愛いー」

「はは、どうも」

それにいちいち応えるこいつ、やっぱりすげえよ。

俺、無理。

天井に向けていた目を閉じて、背もたれに体重をかける。

椅子の軋む音に、反対側を向いていた慶太が振り返った。

「寝ちゃ駄目だよ、涼介」

「分かってるよ」

目を瞑ってるだけ、と伝えたと、それも微妙なんだけどと言いながら、遊びに来ていた生徒会の奴等と話し出す。

それを聞き流しながら、本格的に眠くなってきた頃。

それ、は、やってきた。

ふわりと髪を撫でられる感覚に、意識が浮上した。ぼうつとした頭で、俺どーしたっけー、と思考を起こし始める。

確か、椅子に座ってろって言われて……ああ、寝るなって言われたけどあつさり熟睡しちゃった。

脳裏に、慶太の冷たい笑顔が浮かぶ。

こいつ、可愛い顔して怒ると怖いんだよなあ……。

「ねえ、大丈夫なの？ 疲れてるんじゃない？」

寝ぼけてる耳に、聞こえてくる女の声。

誰だ……、えらい近くから聞こえるなあ……。

「大丈夫ですよ、ただ不貞寝してるだけですから」
んー？ 慶太、なんでクラスの女子に敬語……？

ふわり

また、頭を撫でられた。

思いのほか気持ちいい感覚に、再び意識が深く沈んで……

「莉子さん、写真撮るなら今のうちですよ？」

……

……いこうとした意識が、一気に浮上した。

勢いよく目を開けると、そこには

「……莉子……さん？」

莉子がいた。

莉子はニコニコと笑いながら、俺の頭をもう一度撫でる。

「疲れてるの？ 涼介くん。よく寝てたわね」

まわらない頭のまま莉子の後ろの方に視線を向けると、ちゃっかり坂口と教授が席について何か飲んでいた。

「いつ……」

さわさわと頭を撫でながら、莉子は反対の人差し指を口元に当てた。

「十分くらい前からよ？ 涼介くん、全然起きないんだもの」

「頭撫で撫でなんて、涼介とは思えない光景だね」

慶太の言葉に、いきなり頭が働きます。

おっ、俺、今……っ？

頭を撫でている莉子の手から逃れるように、思わず椅子ごと後ろに後ずさった。

「え？」

椅子が変な音を立てて、一瞬、クラス内が静かになる。

仰け反ってる俺と、宙に浮いたままの莉子の手。

「どうしたの？ 涼介くん」

びっくりしたような表情の、莉子。

や、だって……頭撫でてるのって……

起き抜けだからか、少しパニックになっている俺に、追い討ちをかけるような言葉が隣から発せられた。

「おや涼介。顔、真っ赤」

慶太の声。

慶太の言葉に、過剰反応を起こしたのはクラスの奴等。

「えっ！？　もしかして、彼女！？」

学祭委員の女が、叫びに近い声を上げた。

「えっ、何？」

莉子がびっくりして、後ろを振り返る。

そこに、佐野の声が響く。

「もしかして、新しい彼女の……莉子さん！？」

……、新しい……彼女？

真っ白になりそうな思考から、その理由を探し出す。

そうだ、莉子と初めて会った翌日、教室で修平が勘違いするような事吐きやがったんだ。

その時、確か佐野と木内がいて……

佐野の言葉に静かになっていたクラス内が、蜂の巣をつついたような喧騒に包まれた。

俺が黙っていたから、肯定と取られたらしい。

「ちっ、違っっ！」

慌てて否定しても、誰も聞く耳を持たない。

興味津々のクラスの奴等が莉子を囲んで質問を浴びせているようだけど、彼女自身は何が起きたのか理解できていないらしく、瞬きを

繰り返しながらきよろきよろと問いかけられる声の方に顔を向けるだけ。

「ちょっと、お前等離れろって」

慌てて女の集団（男も混じってた……）をかき分けながら怒鳴ると、また一瞬静かになって悲鳴が上がる。

「あの宮下くんが、凄い大切にしてるーっ！！　これ、本命だよ！　本命の彼女だよ！」

「ありえない！　宮下が気をつかつてる！！　本命だ！」

目を真ん丸くしたクラスの奴等にいつせいに叫ばれて、思わず顔を顰める。

「おまえ等っ、どーいう判断基準だっ！」

かき分けたはずの集団から再び締め出されて、莉子のところにたどり着けない。

いつの間にか横に来ていた教授と坂口が、その様子を物珍しそうに慶太と一緒に眺めていた。

「凄い人気だねえ、涼介くんは」

「ね？　あの、有名なって言われるだけあるよね。教授」

「あはははー、莉子さんも一躍有名人」

教授と坂口の会話に、慶太が面白そうに笑っていて。

「ほのぼのと話してる場合か！」

そう怒鳴って再び集団に突撃しようと振り返った時、その声は響いた。

「あ、莉子さん。来てくれたんだー」

集団を見下ろす高い位置にある顔は、嬉しそうに緩んでいて。

修平に気付いた莉子が、安堵したように微笑んだ。

「修平くん！」

その笑顔に、動き出そうとしていた身体が固まった。

本当に、嬉しそうな笑顔だったから。

訳の分からない状態だったから、見知った顔に会えてほっとしたんだろうつて思っても。

莉子を囲んでいた集団も何か感じるものがあつたらしく、修平と莉子の間の人垣が切れた。

「わぁ。修平くん、かつこいいー」

莉子はそう言いながらその小さな手を伸ばして、大きな修平の着ているスーツのような上着の裾を掴む。

修平は嬉しそうにそんな莉子を見下ろして。

「莉子さん、俺、かつこいい？」

「うん！ 制服もいいけど、修平くんはこういつカッコも似合うね」

俺と同じ様に、制服や服への賛辞なんだけど。

なんて、幸せそうな雰囲気。

のほほんとした、優しい空気。

さっきまでと、大違い。

気付けば、クラスの奴等は困惑したようなそんな表情で、俺とその

二人を交互に見ていた。

でも、今の俺にそれに気づく余裕はなく。

よく分からないけど、そんな二人の姿を見ていたくない。苦しい気持ちだが、渦巻いて。

思わず、固まっていた身体が動いた。

「え？ 涼介くん？」

修平の上着を掴んでいた莉子の手を、掴みあげる。

「涼介？」

少し驚いたような、修平の声。

俺は、何も口にせず大股でドアに向けて歩いた。

身長差、俺と莉子でも結構ある。

足の長さも然りだろうから、小走りについてくるのが音で聞こえた。それでも、ぐいぐいと引つ張り続ける。

クラス内は、静まったまま。

「ちよつ、涼介くんってば」

莉子の声だけが、聞こえて。

教室のドアを出る直前。

今思えば莉子らしい、俺にとっては怒鳴りたくなる言葉が叫ばれた。

「大丈夫、涼介くんも似合ってるから！ その着物姿！」

——だから、そこかよ！

「ね、ちょっと涼介くん！ 歩くの速いっ」

莉子の手を掴んだまま廊下を突き進み、特別教室棟……略して特室棟に入る。

そこは視聴覚室やらPC室やらが集まった、三階建ての校舎。本校舎で学祭はやってるから特室棟は誰もいなくて、静まり返ってる。

三階まで階段を上がって一番奥のドアを開けた。

そこは、図書室。

よく、時間つぶしに使ってる場所。

入り込んで、後ろ手でドアを閉める。

そこでやっと莉子の手を離れた。

「どうしたのー？ ちょっと、息が……」

膝に両手をつけて呼吸を整える莉子を見下ろしながら、自分自身、思いつきり自問自答中だった。

……俺、何してんの？

修平と莉子を見てたらなんかもやってきて、つい莉子連れ出してきちゃったけど。

これ、傍から見たら嫉妬してる彼氏の図？

はからずも、クラスの奴等にネタ提供してきた感じ？

いや、だから！

俺に惚れさせるんだってば。

俺から行動を起こしてどーすんだ！

人生最大の後悔をしながら、思いっきり溜息を零した。

溜息ついでに傍らに視線を移すと、

「莉子さん？」

いるはずの莉子がいなかった。

慌てて辺りを見回すと、本棚の間に小動物発見。

莉子は俺の言葉に、ひょこつと顔を上げた。

「涼介くん、わざわざ図書室に連れてきてくれたのね！ 私の専攻だから」

——は？

意味の分からない言葉を、脳内で咀嚼する。

その間にも、莉子はしゃべり続けてて。

「うわ、懐かしいわ。全訳源氏物語」

あ、私の専攻って——日本古典文学……

先週行った莉子の所属している研究室、確かそんな名前だった。

脳内で消化し終わった俺は、にっこりと笑いながら莉子の方に歩い

ていく。

「そう、莉子さん好きそうだったから。高校の図書室とか、懐かしいでしょ」

はっはっは、決してそんな理由で連れてきたんじゃないけどね！

という心の声はもちろん口にはださず、笑みを貼り付けたまま莉子の横に立った。

ちいつせーなー、しかし。

真横に立つと、身長差が際立つ。

なぜなら、頭のとっぺんしかほば見えないから。

まじまじと上から見下ろしていたら、嬉々としてページを捲っていた莉子さんがその手をとめた。

「でも、あれじゃ修平くんに悪い事をした気がする。あとで、一緒に謝ろうね」

他にも見たい本があったのかそれに指を当てて引き出しながら、数段高い位置にある俺の顔を見上げた。

「莉子マジック……」

「え？」

思わず呟いた俺の言葉に、莉子が小さく首を傾げる。

見上げるから当たり前前だけど上目遣いになってる視線に、瞬きを忘

れたようにそれを見返す自分。
首を傾げた事で、頭のとっぺんしか見えなかった俺の眼に、白い首元を晒す。

「涼介くん？ どうしたの？」

何も言わない俺に、莉子は首を傾げたまま本にかけていた指に力を入れたらしい。

紙の擦れる音に視線を移すと、俺を見上げたままの莉子の指の先に棚から落ちかけそうな本。

「わっ」

とっさに左手を伸ばして、莉子の手ごと本を押さえる。

「えっ？」

何が起きたか理解できなかったのか、自分の手に重なる俺の手をびつくりしたように見つめる莉子。

「本、落ちそうだった……から」

そう言いながら、俺は自分の腕の中を凝視していた。

離せ……離せ、俺！

そう念じているのに。

莉子の手のひらに重なった自分の手は、言う事を聞かず本との間に彼女の手を抑え込んだまま。

さほど広くない、ていうか凄く狭い俺の腕と本棚の間に閉じ込められた莉子は、重なった手のひらを見ている。

ちっちえ……

莉子を見下ろしていたら、何もしていない右手が何かの欲求にうずうずしてきた。

ぎゅって抱きしめたら、莉子はどんな反応をするんだろう。

恋愛ことにはちつとも振れない頭なのは、よく分かりましたけど。でも、抱きしめられたら少しは思考がそっちに向かうんじゃない……

右手が訴えるうずうず感にしたがって、腕を上げようとする俺。

いやいやいや、でもそんな事やって嫌がられたら……

思い直すように腕を下ろす、俺。

そこで、はたと気付く。

え、なに俺、莉子に嫌われるの怖がつてんの？

ありえないありえない、大丈夫。

大体の女は、喜ぶはず……

そうだよ、俺に惚れさせるんだから、抱きしめるくらいはやった方がいいはずだ。

そう自分の考えを肯定して、ゆっくりとその手を莉子の腰に回そうと……

「ありがとう、涼介くん。本を落とすところだったわ」

振り向きながらにつこり笑って微笑む莉子の無邪気な表情に、俺の右手は思わず止まり、

「ね、それ以上は涼介がいろいろまずいんじゃないの？」

背後から聞こえてきた慶太の声に、そのまま撃沈しました。

「唯、教授！」

莉子は俺の背後に視線を移した途端、満面の笑みで本を持ったままの右手を振った。

「見てみて、全訳源氏物語！ 懐かしいよね」

そこで気付いたんだろう、いや俺気付いてなかったんだけど。

「涼介くん、もう本から手を離して大丈夫よ？」

莉子が不思議そうに俺を見上げて、左手を小さく動かしてやっと俺も気付いた。

「あ」

慌てて莉子から手を離して、同時に半身後ろに下がる。

「ありがとう」

ふわりと笑うと、本を手に坂口と教授の方に歩いていく。

その後姿を見ていたら、いつの間にか慶太が隣に立っていて

「——落ちちゃったんじゃない？」

くすくすと腹黒微笑を浮かべて、少し低い目線から俺を見た。

落ちた？ 何に。

そう頭の中で答えているのに、口からその言葉が出てこない。

落ちた？ 莉子に？

何も言わない俺に、慶太は莉子たちに聞こえないような小声で話を続ける。

「クラス、盛り上がったよー。涼介と修平と莉子さんの三角関係話で」

修平。

その名前を聞いて、思わず眉を顰める。

「しかし、莉子さんも鈍い人だね。無邪気は人を振り回す、一番厄介な相手だと思うけど」

「……何が、言いたいんだよ」

視線の先では、莉子と教授たちが面白そうに源氏物語の本を見ていて。

そこから目を反らさないまま、慶太の言葉に答える。

「深入りすると、痛手を被るよって言うてんの。本気じゃないんだから、もう止めとけば？」

「……お前がけしかけたようなもんじゃなかったっけ？」

俺の知らないところで、メアド聞いたり大学院押しかけたり。

「まあね、受験ストレスの解消にはなりました。でも、莉子さん思った以上に天然だからさ」

確かに、すげえ天然。

普通の女だったら、あそこまでされたら少しは期待しないか？

もしかして、好かれてる？ みたいに。

ここまで来ると、わざと気付かない振りしてるんじゃないかって思っちゃう。

そうじゃないんだろうけど。

「……天然だからなんだよ」

俺に落とす事はできないってことか？

慶太は自意識過剰と呟きながら、首を振った。

「涼介がはまるって言ってるの」

「はあ？」

莉子に？ 俺が？

「ありえない」

「って言える？」

くすくす笑い出した慶太が、何を指してそう言ってるのか分かるだけにムツと口を噤む。

「修平とのやり取り見て、莉子さん連れ出しちゃうのに？」

そこまで言った時、のほほんとした声が図書室に響いた。

「莉子さん、ここにいます？」

ドアに、修平の姿。

「わあ、修平くん！ どうしたのその格好」

格好の方にすぐ頭が行く莉子が、なんとというか莉子らしい。

修平を見る莉子の顔が、満面の笑みを零す。

その笑顔に相好を崩す修平は、バスケのユニフォームを着ていた。

「これから部活のパフォーマンス試合やるんだけど、莉子さん見に来てくれる？」

「部活？」

とてとて、なんて擬音がつくような歩き方で修平に近づくと、莉子は首を小さく傾げた。
癖らしい。

修平は莉子の頭でも撫でちゃうんじゃないかと思うくらい、幸せそうに笑ってる。

「うん、バスケ」

「似合うね、ユニフォーム」

「ていうか、あんた凄い筋肉ねえ。バランスいいわ、眼福眼福」
いつの間にか近寄っていた坂口が、修平の腕を人差し指でつつきながらにやりと笑う。

「なんか目付きがやらしいよ、坂口。でも、ホントいい身体してるなあ」

教授まで腕をつつき始めて、三島も触ってみ？ と促した。

「……っ」

「どうしたの、涼介」

動き出そうとした身体を、慶太に止められる。

「本気じゃないんでしょ？」

「……うるさいな」

なんか修平と莉子と一緒にいるのはいらいらするんだから、仕方ないだろ。

「あのね」

無言で睨み返すと、肩を竦めた慶太と目が合った。

「修平が本気っぽいから、遊びなら止めなって言ってるの。涼介も本気なら止めないけど、どっち？」

「は？ 本気？」

こんな短期間で、本気で落ちるものか？

俺の疑問に気付いたように、慶太は少し目を細めた。

「時間じゃないと思うよ、こーいうのって。涼介には難しいか」

「どーという意味だよ」

呆れたような顔に言い返すと、慶太は肩を竦めてそーいう意味と呟く。

「追いかけてばかりでちゃんと恋愛と向き合ってこなかった涼介には、難しいって言ったんだよ。本気じゃないなら、修平の邪魔しちゃう駄目だよ」

そう言い捨てて俺を見上げる慶太は、なぜか底冷えするような色その目に浮かべていた。

眼下では、修平がシュートを決めている。
上がる、歓声。

ここからでも見える、莉子の姿とそれを見る修平の姿。

皆で行こうと言う莉子の言葉に、首を横に振った。
不思議そうな表情の莉子と修平と、その他の生暖かい視線に背を向けて窓際の椅子に座った。

——天然は手に負えない。

確かになあ……と、窓枠に頬杖をついた。
莉子も天然だけど、はっきり言えば修平も天然。
周りの空気を読むどころか、空気ってナニ？ とか本気で聞かれそうな感じ。

——本気じゃないなら、修平の邪魔しちゃ駄目だよ

慶太の言葉が、脳裏に浮かぶ。
確かに、修平は莉子に気があるかもしれない。

っていうか、ある。うん。

でも、先に目をつけたのは俺で。

横槍いれんじゃねえって、俺、思っのおかしい？

「おかしいよ、涼介」

一瞬、目の前が真っ白になりました。

俺の脳内思考に返事が……

「涼介らしくないね」

傍に誰かが寄ってくる、気配。

強めの女の口調に、誰かが図書室に入ってきた事に気づく。

内心、焦った俺はそちに視線も向けず、口も開かなかった。
いや、なんか驚きすぎて声とか掠れそうだから。

鼻につく、香水の匂い。

視界に入ってきた茶色い髪。

「涼介、ずいぶん可愛らしいお姉さんが好みだったんだ」

俺のすぐ前の椅子に腰掛けた、女。

……見覚え、ある顔だな。

名前、出てこないけど。

「本命なんだって？」

くすくすと笑うその雰囲気は、慶太そっくりで。
イラついたけど、無表情のまま校庭を見続ける。

「本命さん、高坂くんと仲いいよね。ホントに、涼介と付き合ってるの？」

つきあってねーよ、だからなんだよ、おめーには関係えねーよ。

「ねえまさか、涼介が追いかける恋愛？」

追いかける恋愛……？

気にしないようにしていても、いつの間にかこの女の言葉に脳内で返事していて。

意識がどんどん、女に向かう。

「告白してもさ、お前の事知らないけどそれでもいいーなら、それが常套句の涼介がさ。似合わなすぎて、うけるんだけど」

「……うるせえな」

つい、答えてしまった。

女は嬉しそうに口角を上げると、椅子から立ち上がる。

「本当に、あの人の事好きなの？」

「答える理由、ないね」

一度開いてしまえば、もう何度口を開こうと変わらん。もともと、俺は短気。

言い返す方が、性に合ってる。

「あるんじゃない？ 最後の彼女だった私にくらいは」

そう言っただけを返すと、図書室から出て行った。

そうか、今の付き合ってた女だったのか。

つか、タイミングよすぎだったの。

俺が一人になるの見計らつてきやがったなら、ストーカー一步手前だな。

心の中で悪態をつきながら、視線をまた校庭に戻す。

眼下では、バスケがまだ続いている。

いつの間にか、教授が乱入してシュートしてる。

……あ、はずした

悔しそうに人差し指を立ててもう一度とバスケ部員にせがんでいる教授の傍には、坂口と莉子の姿。

そこに修平が近寄っていつて、ボールを莉子に渡す。

……ボールに潰されそうだな

思わず、強張っていた頬が緩む。

小動物が玉転がしでもしそうな感じ。

莉子は困ったように修平を見上げていたけれど、坂口に押し出されて渋々ボールを構えた。

それを周りが囃し立てる。

無理しないでーとか、そんな声が聞こえてくる。

それに同意しながら、莉子の姿を見つめた。

どう見ても、シュートっていうかボールを高く投げられないだろ。

フォローしたいのか、修平が一步踏み出した時だった。

トーントーン……

バスケットボールを軽く地面に叩きつけた莉子は、次の瞬間それを両手で掴むと綺麗なフォームで宙に放り投げた。

それは、綺麗な弧を描いてゴールへと吸い込まれていく。

「——え？」

数秒後、静まり返ったコートに歓声が鳴り響いた。

「え？」

誰もが、呆気にとられていた。

ちびっこの莉子が、まさかジャンプシュートを決めるとは。つてか、バスケットボール持ったままよくジャンプできたな。そこからして、びっくりだ。

「あら、まだ鈍ってないのねえ」

静かな中、坂口のさも当たり前のような声が響く。

「ねー、私もできるかわかんなかったけど。よかったー」

「……三島。お前、こんな特技があったのか」
教授の、驚いたような声。

こっちの反応の方が、普通だろう。

「すごいねー、莉子さん」

修平がにこにこ笑いながら拍手した途端、割れんばかりの拍手喝采がコートを包んだ。

「すげえ、すげえよ！」

「意外性の女……」

「ありえねえ、その身長でどんな腕力してんだよ」

「見た目で騙されたーっ」

等々（一部抜粋）、皆結構失礼なこと言ってる気がするけど、本心からそう思う。

絶対、ありえねえ

驚愕の事実じつと見ていたら、ふいつと莉子がこっちを見上げた。目が合って、思わず反らす。

「涼介くん！」

うわっ、呼びかけやがったっ。

横目で下を見ると、案の定ほとんどの奴等が俺の方を見上げてる。呼びかけんなよ、恥ずかしいから。

無邪気というか天然は、ホント手に負えねえ……。

今、俺見世物になってるんだけど、気付いてる？　なあ、莉子さんよ。

慶太の言葉をかみ締めながら、諦めて顔を莉子に向ける。

そこには、予想を裏切らずにここにこと笑う莉子の姿。

「見てたのー？　褒めてもいいよー！　だから、ご褒美頂戴！」
ごっつ、ご褒美……？

一瞬、ドキッとした俺ってスケベ？

だって、ご褒美って言ったらキスとかキスとかキスとか――

あー、はいはい。ごめんなさい。

莉子に限ってそれはないですね。

でもまー、確かに凄かったっちゃあ凄かったけどねー。

ここはのっておいてやるか。

「あー、凄いですねー。なんですかー、何が欲しいんですかー」

めっちゃ棒読みで言ってやったのに、一欠けらもダメージ受けないのか莉子はでっかい声で思いつきり叫んでくれました。

「涼介くんの制服姿の写真を撮らせて!!」

……さっきのジャンプシュートは幻かと思ったけど。

まじっことなく君は莉子だよ——

8 (後書き)

すみません、今回短めです。
次回、少し長く更新しますので！

「絶対、嫌だ」

「ご褒美くれるんでしょ？」

デジカメ片手にちょこんと俺の前に立つ莉子と、ニヤニヤ面白そうに遠巻きに見守る教授以下二名。

修平はまだ部活の方でやることがあったらしく、ここにはいない。

えーと、俺の今の現状は。

慌てて教室に戻って制服の入ってるスポーツバッグを引っつかんで逃走を図ろうとしたら、莉子に捕まったわけで。

つか、早くねえか？

どんな身体能力だつ。

「莉子は制服の事になると、素晴らしい身体能力を発揮するわけ
す」

坂口が俺の思考を読んだかのように説明してるその言葉に、やっぱり制服かよ、と溜息を零す。

「ほらほら、その衣装嫌がってたんだから、さっさと着替えればいい

いじゃない」

慶太が手近な空き教室のドアを開けて、俺においでおいでと手を振った。

「着替えたいけど、写真は嫌だ」

スポーツバッグを肩にかけてふいっとそっぽを向くと、坂口が嫌みったらしそうに鼻で笑う。

「あー、どうせあれでしょ？ モテる涼介は昔っから隠し撮りとかされちゃってて、しかも高値で取引とかされちゃってて、気付いたら知らない人まで自分の写真持つてーみたいナ。それで写真嫌いなんて？」

いつの間に呼び捨てだ！

「そうそう、凄いステレオタイプ」

坂口の言葉を慶太が続けたあと、二人して顔を見合わせてニヤリと

おまえ等、どんだけそっくりなんだよ。

「とにかく、俺は嫌なんだっての」

少し強めの口調で言う、莉子はぱちぱちと瞬きをした後、ふう…

…と溜息をついた。

「そんなに嫌なら仕方ないかあ」

そう言っただけでいたデジカメを（どんだけ前から構えてるんだっての！）、ポケットにしまいこんだ。

「わがまま言っでごめんね。とりあえず、着替えてきたら？ その

衣装、着てるの嫌なんでしょう?」

——やけに、あっさりだな……

あんまりにもあっさり諦められて、若干拍子抜け……
だって、あんなだけ人のことガン見してた莉子なのに。
制服に対しての情熱というか執着は、めっさ強そうなのに。
もっごねられるかと思った。

「なんだ、もう莉子さん諦めちゃうの? もっと涼介のこと、苛めてやればいいのに」

慶太はそう言いながら、俺を空き教室に促す。

それに従うように歩き出した俺に、莉子が声を掛けた。

「ごめんね、無理言って」

本当に申し訳なさそうに小さく頭を下げる莉子に、なんとなく後ろめたい気持ちになりながら教室のドアを閉めた。

着物から制服に着替えながら、後ろめたかった気持ちがどんどん深くなってきた目を伏せる。

いや、俺って全然悪くないんだけど、あっさり引き下がられるとなんとかなく気になるのは……俺が日本人だから? ↑いや、そうじゃない

制服のシャツのボタンを留めながら、思わず唸る。

写真ぐらい、別にいいか……？

自分に惚れさせてからプライドずたずたになるような感じで振るのが目的なわけで、まずはあの天然を俺に振り向かせなきゃならない。つか、ライバルが制服ってどうよ……

思わず溜息をつきながら、シャツの裾をズボンの中にしまいこむ。

しかも修平の行動が若干気になるわけで、一歩でも差をつけておいた方が……

あいつだったら、ほいほい写真なんて撮らせるんだろっとなあ。

俺が写真を了承しなけりゃ、修平のどこにでも行きそっくだよな。仲よさげだし。

でも、莉子に他の奴なんか撮られたくな……

そこまで考えて、ふと思考を止める。

「は？」

……俺、今何考えてた？

莉子に他の奴なんか撮られたくない？

いやいや、何俺おかしいなこと考えてんだよ。
別に撮りゃあいいじゃねえか。

修平だろうが慶太だろうが、その他大勢だろうが。

頭をぶるぶると振って阿呆な思考を追い出す。

そのまま着物を腕にかけて荷物を手に取ると、教室のドアを開けた。

パシャッ

途端、目の前が一瞬真っ白になった。

「え？」

顔を背けて何回か瞬きすると、残像のように目に映っていた白いもやが消えてなんでもない廊下を映し出す。

「ふふふ、ご褒美頂きましたっ」

莉子の、嬉しそうな声。

……は？

ご褒美？ パシヤツ？ 真っ白？

顔を前に向けると、デジカメを構えた莉子の姿。

「あっさり騙されたわねえ、涼介」

坂口が笑いを堪えながら、口元を押さえてて。

「押して駄目なら引いてみるか。三島、お前変な駆け引きに強いな。その頭を研究の方に向けてくれ」

好き勝手な事を言ってる外野は放っておいて、莉子は嬉しそうにデジカメを鞆にしまった。

「ごめんねー、涼介くん。不意打ちで。だってこんなに制服似合ってるのに、写真撮らないなんて私的に私が廃る！」

——は？

「うつふつふつ、修平くんのユニフォーム姿も執事さんも撮ったし、慶太くんの牧師さんも撮ったし、今日は最高！」

——へ？

うきうき顔の莉子は俺の手を両手でぎゅっと握ると、満面の笑みでそれを振った。

「ありがとうね、涼介くん！ 私の趣味心は大満足！ 眼鏡してたらもつと満足だったけど、まあいいや。またどこかで会ったら制服姿堪能させてねー」

――え？

何も言えないままの俺の手をぶんぶんと振り終えると、莉子はくると教授たちの方に振り返った。

「ほら、教授も唯もぼーっとしてないで、研究室に戻らないと！ 今日こそ資料の整理を少しでも進めないと、年末が辛くなりますから」

跳ねるように小走りで教授達の下に駆け寄った莉子は、不満の声を漏らす二人の背中をその小さな手で押し始める。

「もう少ししようよ、莉子」

残念そうな、坂口のぼやき。

「資料の整理なんざ、やらんでもいいつ。俺が許す！ 俺が許すから、女子コーサーをもっと見たいっ！」

教授の言葉には、莉子と坂口のドツキが一発。

「最後に困るのは教授ですから！」

まだ納得いつてない表情だったけれど、教授と坂口は肩を竦めて下に降りる階段の方へと歩き出した。

「——え？　莉子さん？」

俺はというと、ほとんど頭がついていつていない。
理解が出来ずに思わず莉子の名前を呼ぶと、彼女はくると振り向いて首を傾げた。

「何？」

「え……何って……」

鸚鵡返しのように同じ言葉を繰り返した俺に、ああ！、と何か気付いたのかぽんと手を叩いた。

「不意打ちしたの、怒ってるの？」

え、不意打ち？　……、ああ、不意打ち。

写真の事なんて、まったく頭に残ってなかった。
そうじゃなくて。

——またどこかで会ったら……って？

莉子は拝むように顔の前で両手を合わせると、ぺこっと頭を下げた。

「どうせ、もう二度と会わないだろうから、許して！」

——どうせ、もう二度と会わない？

「じゃーね、涼介くん、慶太くん！ 受験頑張ってね」

弾んだ声でそれだけ言つと、莉子たちは帰っていった。

いきなり静まり返つた廊下。

教室の前で立ち尽くす俺と、壁際に寄りかかっている慶太。

俺は動きを止めたまま、視線をうろつろと動かす。

莉子が言っていた言葉を、頭の中で繰り返しながら。

えーと……二度と会わないって、莉子はもう俺と会う気がないってことか？

通りすがりとかで会つかもしれないけど、それ以上会う気はないと。

「うわー、涼介が振られたところ初めて見たかもー」

面白そうに慶太が呟くと、ああでも……と続けた。
「ていうかさ、振られる以前の問題かも？　だって、莉子さんに何も伝わってないし」

やっと、頭が理解した。

もう、莉子にとって俺は会う理由のない人間という事。
写真撮れたし、もういーやって？

莉子にとっての俺は、制服の似合う人。
それ以上でも以下でもナシってこと。

「寂しいんだー、涼介」

壁によりかかったままの慶太が、くすくす笑う。

なんかこいつ、莉子が絡むとイライラする言葉を吐くな。

慶太の言葉に、つい口調が強くなる。

「別に、いいよ。俺だって莉子に会う理由ないし」

「ふうん」

慶太はそう呟いて、口を噤む。

人の考えを見透かすような、こいつの沈黙は好きじゃない。

慶太のほうは見ずに、莉子たちとは反対側の階段に向かって歩き出す。

「ねえ、本当にもういいんだ？」

慶太は俺を呼び止めるわけでもなく、ただ疑問を投げつける。

「メアド知ってるのは俺だけだし、本当にこれで会えなくなっちゃうけど？ 追いかけないの？」

「うるせえな」

「ふうん、じゃあ修平に協力しよう。けしかけた手前、罪悪感だつたんだよね。莉子さんに涼介が近づくの」

それには答えずに、歩き続ける。

協力だろうがなんだろうが、勝手にすりゃあいいたろ。どうせ、莉子には通じねえよ。

「涼介も、これで少しは分かったんじゃない？ 眼中にも入れられない人の、悔しさってものをさ」

思わず、足を止めた。

眼中にも、入れられない……？

「じゃ、ね」

後ろでは慶太が俺とは反対方向に歩き出す音が、響く。
上履きの底が廊下を踏みしめる、規則的な音。
それを聞き流しながら、慶太の言葉が脳裏に繰り返す。

——眼中にも入れられない人の、悔しさつてものをさ

慶太は。

あいつは俺に、一体何が言いたいんだ——

慶太の足音が階段に消えて、俺は自問自答しながら横の壁に寄りかかる。

要するに、莉子にとって俺は眼中にもないってことを言いたいわけだろ。

そんなこと、言われなくても分かってるっての。
なんなんだよ、あいつ。

莉子が絡むと、言う事が本気でむかつく。

「くそっ」

押さえつけられない鬱憤を壁に八つ当たりしてみたけれど、殴った右手が痛いだけで何の解消にもならない。

目を瞑って、怒りを押さえつける。

長く息を吐き出してから、もう一度壁に背中をつけた。

「もういいよ。……面倒くせえ」

制服しか興味のねえ女、俺の方こそ願い下げだつての。

大体、何で俺が追いかけなきゃ行けねえんだよ。

プライドとかより、もう、面倒くさい。

莉子にとって俺がどうでもいいように、俺にとってもどーでもいい人間だったんだよ。

崩壊・1

意思ってものは

最後まで貫けなければ

ただの

強がりになるわけで……

第五章 崩壊

- 1

高校最後の学祭は、人気のない屋上で終えた。

いつの間にか莉子に振られた（？）事が噂になっていて、物珍しそうに俺を見る周りの視線から逃れた結果。

でも二日目も三日目も、ちゃんとクラスの役割は全うしたさ。

振られて拗ねて出てこないなんて言われたかないし。
慶太も修平も、いつもと別に変わらない態度だった。

だから俺は普通になんでもなく、修平に言った。

——俺、莉子の事やめたから

その時の修平の表情は、なんだか目に焼きついて剥がせねえ。勘繰るでもなく、いぶかしむでもなく。

目元だけ笑んで、「そっか」と答えた。ただ、それだけ。

その時だけは、いつもの修平じゃなかった。

隣で慶太がどんな表情をしていたかなんて知らないけど。

きっと、本音なんて少しも見えない笑みを浮かべていたんだろう。

そして、いつも通りの生活に戻った。

「あの、私、宮下先輩のこと好きなんです」

いつの間にか葉の散った物寂しげな木が、校舎を囲っていて。ほとんど誰も来ない放課後の校舎裏に、俺はいた。

目の前の子は、一つ下の後輩。

俺にとって、顔も知らないこの子は。

俺を、好きだと言う。

なんで、話したこともない俺を、好きだと言えるんだろう。

「俺、君の事知らないんだけど」

いつもどおりの、答え。

「これから、その、知っていただければ……っ」

いつもどおりの、返答。

「知らない人と、付き合うつても変じゃない？」

「その……」

真っ赤な顔のまま、俯いてしまう。

それでも望みを消さないように、何か懸命に考えているみたいだけど。

……面倒

物心ついた頃から、幾度も繰り返されてきた光景。

「付き合ってくださいっ、お願いしますっ」

なんでこの流れで、そうなるのかな。

知らないっていつてゐるのに。

「あー」

もう、面倒だからいつか。

適当に付き合えば。

そう思って口を開こうとした時、

——もう二度と会うことないだろうから、許して！

にこやかに笑う、莉子の声が脳裏に響く。

——眼中にも入れられない人の、悔しさってものをさ

慶太の、何か挑むような声がそれにかぶさる。

思わず、顔を背けた。

「…………宮下先輩？」

俺のその態度に、不安げな声が掛かる。

小さく息を吐いて、もう一度視線をその子に戻した。

「悪い、付き合えない」

もっと、何か言いようがあるのかもしれないけど。

それしか言葉が思いつかない。

これで引き下がってくれるかと思ったのに、そうではなかった。

「他の人は知らなくても付き合えたのに、……私は駄目ってことで
すか？」

泣きそうな表情を隠そうともせず、両手をぎゅっと握り締めて俺を
見上げてくる。

「君が駄目とかそういうことじゃなくて。悪い」
その視線を受け止めきれず、目を逸らしながら踵を返した。

崩壊・1（後書き）

少し、お知らせとお願いです。

「君は何を想う？」の続編に関して、サイト（マイページにリンクがあります）でアンケートを設置しています。

9月15日までになりますので、宜しければご意見お願いします！

……内容は……哲の続編の書き方という、なんじゃそりゃ的なアンケートだったりするんですが……↑優柔不断

「涼介。昼ごはん、食わないの?」

翌日の、昼。

屋上に寝転がっている俺の横に、修平と慶太が腰をおろした。それを目の端に映してから、瞼を閉じる。

「……昨日の夕飯。食いすぎて胃がいてえ」

それだけ言っと、仰向けの体勢から二人とは反対方向に身体を横向けた。

「大丈夫?」

心配そうな声で頭を撫でる修平に、小さく頷いて大丈夫と呟く。それでもゆっくりと頭を撫でていた修平は、慶太の笑い声にその手を離れた。

「なんか、覇気がなくなっちゃったねえ。涼介ってば」

パンの袋でも開けているのか、ガサガサという音。それに混じって、慶太の言葉は続く。

「修平は、その後どうなの?」

「その後って?」

のほほんと聞き返す修平に、慶太は同じ様にのんびりと聞き返す。

「莉子さんだよ。会ってるの?」

——莉子?

一瞬、ぴくり、と反応してしまったのを隠すように、ゆっくりと首をまわす。

「今度の土曜日に、会う約束してるよ」

——え……

「莉子と、付き合い始めた、のか？」

思わず上体だけ起こして、修平を見る。

あれだけ恋愛に疎い女だったのに、こんなにあっさりと？

修平はペットボトルを持ったまま、慌てて両手を振った。
顔は、一気に真っ赤。

「違う違う、ただバスケしに行くだけ」

「え、そうなの？」

それに反応したのは、もぐもぐと口を動かしていた慶太。

「莉子さん、子供の頃ミニバスケやってたんだって。中学でバスケットに入ってたけど身長差がついた頃から周りについていけなくなつて止めたんだって。だから、たまにはどうかなって思つて」

「ああ、だからこそそのジャンプシュートだったんだね、学祭の時。それで修平から、誘ってみたんだ？」

うん、と嬉しそうに頷く修平。

「そつか。付き合ってないんだ、まだ」

慶太の言葉に、照れくさそうに頭に手をやった。

「全然、そんな感じじゃないから」

「莉子さんだもんねえ」

苦笑気味の慶太に、修平はそれでも嬉しそうに笑う。

ふうん……

修平、莉子と出かけるんだ。

誘ったら、莉子が了承したって事だよな。

脳裏に、莉子の言葉が響く。

——もう二度と会うこともないだろうから

修平には、二度でも三度でも会うつてか。

制服、一番似合うとかほざいといて。

そんな俺とは、もう二度と会わないって断定しやがったくせに。

「涼介、なんて顔してんの」

「……は？」

目の前に慶太がパンを差し出しながら、くすりと笑う。

「気になる？ 莉子さん」

なんとなく流れでそのパンを受け取りながら、頭を振った。

「別に、全然」

袋をあけて、パンをかじる。

甘え……

「会いたければ、連絡すればいいじゃない。そんな顔してないで」
「うるせえな、別に会いたかないし。つか、どんな顔だってんだよ」

普段食べない甘いパン……メロンパンを腹におさめながら、目線だけ慶太に向けた。

慶太は食べ終わったパンの袋を丸めてビニール袋に入れると、缶珈琲を一口飲み込む。

なんとなく答えをじらされている気がしてならないのは、俺、うがりすぎ？

慶太はゆっくりとそれを嚥下したあと、につこりと笑う。

「すごい、拗ねた顔。涼介でも、そんな表情できるんだね。な、修平」

話を振られた修平は、のほほんと笑う。

「そうだねえ、初めて見た」

「拗ねてねえし、どーでもいい」

食べ終えたパンの袋を丸めて慶太に放る。

それを片手で受け取ると、くすくすと笑い出した。

「それが拗ねてるって言うんだよ。まったく、子供だねー」

そこまで話したとき、予鈴が辺りに響き渡った。
それにつられるように、慶太と修平が立ち上がる。

「そーいえば涼介。告白、片っ端から断ってるそうじゃないの」
続いて立ち上がりかけた俺は、中腰のまま慶太を見上げた。
「何で知ってるのって、表情だね。そこらへんは企業秘密。どーしたの、なんか心境の変化？」

企業秘密ってなんだよ。

内心突っ込みながら、身体を起こす。

「別に、面倒だから」

ズボンについた汚れを払いながらそう言うと、

「へえ？ 断るのが面倒って言ってたのに」

慶太が、物珍しそうに呟く。

「でも、いいんじゃない？ 優しくなったね、涼介」
「——は？」

優しく？ 告白断って、優しく？
意味分からん。

考えている事が顔にそのまま出たのか、慶太は頷くと屋上の出口に身体を向けた。

「断るのも、優しさだよー」

「慶太、いい事いうねー」

同じく歩き出しながら、修平がにこにここと笑う。

そうでしょ？ と、おどける様に肩を竦めて話す二人に、俺はゆっくりと背を向けた。

「だから素直になって……って、あれ？ 行かないの？ もう、昼休み終わっちゃうよ」

出口とは反対のフェンスの方に歩き出す俺に、慶太が立ち止まる。俺は少し顔を傾けてそっちを見ると、

「胃が痛いから、次、サボる」

それだけ言って顔を前に戻した。

「大丈夫？」

修平の心配そうな声に頷くと、慶太が大丈夫だよと俺の代わりに言った。

「メロンパン、おいしかった？」

そして、この意味不明な問い。

よく分からずに、それでも上手かったと答えると、

「胃が痛いのに、メロンパン、結構負担だったでしょ」

と、笑いながら屋上から校舎内に入っていた。

――バレたら

別に胃が痛いわけじゃなくて、ただ、イライラしているだけだって事を。

目の前には、小動物の横顔。

俺だと少しも気づかず、違う奴を目で追っている――

遡る事、一時間前。

「涼介、あんた暇なら買い物行ってきてよ」

土曜日、リビングのソファに座ってアイスを食っていた俺に、母親から指令が下った。

「ああ？ 買い物くらい、自分で行けよ」

最後の欠片を口に放り込んで、カップをローテーブルに放り投げる。母親はキッチンから顔だけ出して、俺と似た顔で俺と似た表情を浮かべた。

「鬱陶しいのよ、男子高生。買い物行って、夕飯まで帰るな」

「てめえの息子だろ」

「なら、言う事聞いてさっさと出て行け」

投げ渡された買い物リストを頭で受けながら、諦めてソファから立ち上がった。

だから。

決して、そうじゃない。

別に、目的があったわけでも、理由があったわけでも。たまたま何も考えずに歩いていたら、ここに来ただけで。

——いや、覚えてたけど。気になってたけど

でも、勝手に足が向いたただけだ。

だから、俺の意思じゃない——っ

目の前には、莉子の姿。

初めて莉子にあった日に、俺たちが休んでいたファストフード横の花壇にちょこつと寄りかかっていた。

ここに来ようと思ったわけじゃない俺は、意識が浮上した時、いきなり目の前に莉子の姿があつて声を出しそうなほどびっくりした。耐えたけど。

癖のない真っ黒い髪を後ろで一つに結んでクリップで留めて。

ジーンズに、シャツとインナー。

足元はスニーカー。

外見詐欺、そう言った慶太の声が脳裏に響く。

中学生と言ってもおかしくない見た目の莉子は、横に立つ俺には気付きもせずに、さっきから通りを歩く人達をじっと眺めて楽しんでいる。

制服を着ている奴が来ると、もう、楽しそうに凝視して。

指がぴくぴくしているのは、写真でも撮りたくて我慢しているんだろうか。

まあ、いきなり撮ったらおかしな人だもんな。

俺は横のファストフードで買ったコーラを飲みながら、莉子の行動をずっと見ていた。

無表情で人波を見てると思ったら、ピクツと何かに反応して目で追う。

たまに溜息を漏らしているのは、なんなのか分からないけど……

……こいつ、俺に少しも気付かねえ

さっきから真横に立ってるのに、まるで俺が銅像にでも見えるみたいに。

確かに制服着てねえし、眼鏡かけてるけど。

……胸に浮かぶこのもやもやは、きっと莉子如きにシカトされてるからだ。

少し高揚してる気分なのは、きっとどう苛めてやろうかわくわくしてるからだ。

決して、嬉しいわけじゃない。

この、小動物……

一瞬、声を掛けようとしてあげた手を下ろす。

だめだ、こいつから離れないと……

少なくとも、もうすぐ修平がここに来る

こんなところ見られたら、何言われるかわかったもんじゃない……

俺は、莉子を気にしてるわけじゃないんだから。

だから、ここを離れる。

分かったか、俺！

動き出さない体に納得させるように脳内で叫ぶと同時に、少し離れたところから莉子を呼ぶ声が上がった。
とつさに、花壇の裏へと歩き出す。

「莉子さん、待たせてごめんなさい！」

それは、修平の声。

いつもより、トーンの高い。

「修平くん、走らなくて大丈夫！ そんな待ってないよ」
高めの声を張り上げて、修平を呼ぶ莉子の声。

軽く走る足音がして、莉子の横に修平が立った。
そこまで見て、顔を背ける。

間に背の高い植え込みを挟んだ、花壇の表と裏。
俺に気付かない二人は、楽しそうな声で挨拶を交わす。

「私も修平くんくらい大きくなれば、バスケ諦めなかったんだけど
なあ」

心底羨ましそうな声で莉子が言うと、修平はそんなことないよと笑う。

「莉子さんはそのままが可愛いよ」

修平にしちゃ……、なんか照れる言葉を言っとな。
それだけ、莉子を好きってことか。

「それ、どーいう意味？」

相変わらずの恋愛音痴な莉子は、ホンキで分かりませんって声で聞き返す。

ああ、修平の努力も意味なし……

「だって、そうしたら俺たちライバルになるでしょう？ そんな人、簡単にバスケ誘えないよ」

——ああ、こいつも恋愛音痴だったんだっけ……

なんか聞いてて脱力するな、この天然会話。

修平。

性別違うんだから、ライバルになってもバスケ誘えるだろう。
試合は、男女混合じゃないんだからさ——

「じゃ、行こうか。修平くん」

「うん、莉子さん」

バスケの話をしていた二人は、しばらくすると目的地に向かって歩き出した。

数秒、時間差を置いて振り返る。

植え込みの向こうに、身長差が激しい二人の後姿。

道行く人も面白いのか、すれ違ってから振り返り向いて見ている。

それでも二人話す表情は楽しそうで、嬉しそうで。

会話は別として、見た目は立派に恋人同士の雰囲気だった。

「何よ、あんたもう帰ってきたの？ 邪魔くさいんだから、外にいればいいのに」

玄関をあがった途端に廊下に顔を出した母親が、非難するような視線を向ける。

それを流すように、出る時に投げ渡された買い物リストを階段を上りながら母親に向かって投げつけた。

「買い物もしてこない！ 何あんた、思春期？ 反抗期？ 青い春？」

青い春ってなんだよ、普通に青春って言えねえのか……、いやそっちの方が恥ずかしいか。

というか、こんな状態でも突っ込みを入れる自分の性格が嫌過ぎる。

黙ったまま、階段を上りきって部屋に入る。

ドアの閉まる音と共に、ベッドに倒れこんだ。

脳裏に浮かぶ、修平と莉子の姿。

見送る自分が馬鹿らしく思えて、溜息をつく。

俺にはまったく気付かないくせに、修平にはちゃんと気付く。

本当に、俺って制服のおまけだってわけか。

私服だと、隣にいたって気付かれない。

落ちていく最悪な気分、ガシガシと頭をかく。

「っ」かなんだって、こんなに莉子の事が気になるんだ？

もう、どうでもいいじゃないか。

最初は、俺を意識しない莉子に興味を持っただけ。

顔しかとりえが無いとか言われてむかついていた時に、その顔にさえ興味を持たなかった莉子に、プライドをぎたぎたにされただけ。

その、仕返しをしたかっただけ。

それだけだったはずなんだ。

途中まで、上手くいった気がしたのに。

恋愛感情に持つていけないくても、それでも知り合いくらいにはなれた気がしてたのに。

——もう二度と会うことはないだろうから

そんな事、初めて言われた。

口に出さずに自分で思っていた事があっても、人に言われた事なんてなかった。

だから、気になるんだろうか。

悔しいから？

俺には会わなくて、修平とは会うから？

それって、ただの子供じゃんか……

「あー、くだらねえ」

「なにがー？」

うつぶせの身体をくるりと仰向けにした時、部屋のドアが開いてひよっこりと顔が出てきた。

「お前、何腐ってんの？」

のほほんとした顔になんとなく修平が被って、視線を天井に戻す。

「うるせーなー、入ってくんないよ」

「おやおや、本当に青い春？」

俺の言葉を見殺して入ってきたのは、七歳上の兄貴、皓。既に社会人の皓は、俺と違った女顔。

「青い春って一体なんだよ。かーさんも皓も、頭沸騰中？」

「まったく、かーさんに似て口悪いんだから」

「皓はとーさんに似て、女っぽいんだよ」

……一体、どんな会話だ。

うちの両親は、父親が女顔で母親が男顔。

昔からからかわれてきたらから、もう慣れっこだけど。

ベッドの脇に座り込んだ皓は、くすくすと笑いながら壁に背をつけた。

「で、一体何をそんなに落ち込んでるのさ。涼介がイライラしてるとか、かーさんも心配してイライラするんだよねー」

「心配してイライラって、おかしくねえか？」

普通、心配してやきもきとか、心配して悲しむとか。

「そつくりじゃない、涼介と。そのとばっちりを食うのはいつも俺ととーさんなんだから。どうしたの、何があったの？」

小さく首を傾げる姿は、莉子に似てる。

俺より七つも上の癖に、いつも俺より年下に見られる皓兄貴。身長も、皓の方が上なのに。

つか、男の癖に女に見えて、しかもある程度綺麗に見えるのは、まずいんじゃないか。

「あー、マジなんでもねえ。つか、その女顔、目の前で晒さないで」

なんか、雰囲気か莉子を思い出させるから。

「んん？ 涼介には珍しい、女の子がらみか」

皓はしゃがんでいた身体を起こして膝たちになると、ベッドに両腕を置いて寄りかかった。

「そんなこと言ってねーだろ。ったく、女みてえにべらべらうつるぜえ」

「おーおー、反抗期。涼介に好きな子がねえ」

仰向けの身体を起こして、皓を見下ろす。

「怒らせたい？」

「怒らせたいかも」

即答する皓の頭を、右足で押しのける。

「お前、おにーちゃんの頭を足蹴にする？」

後ろに両手をついた皓は、苦笑気味な表情を浮かべて立ち上がった。

「はいはい、じゃー出て行きましょかね」

腰に手を当てて叩く仕草をしながら歩き出す皓の背中を睨みつけると、ドアを開けたその姿のままもう一度振り返った。

「自分の気持ちには、素直になった方がいいよ？ 後で、絶対後悔するから」

「うるせーなっ」

手元の枕を投げつけると、上手い具合にそれをかわして部屋から出て行った。

閉まったドアを一睨みして、もう一度ベッドに横になる。

なんで、女がらみって断定できるんだ。

気持ちに素直？

何の気持ちに。

「あー、うるさいうるさいっ」

うつぶせになって、頭をガシガシと掻く。

面倒なんだよ、もう、とにかく面倒！

「よし、莉子の事は忘れよう！ もう、終わった事だ。俺のプライドも、言われた事もどーでもいい！ どーでもいいことを考えるほど、俺は暇じゃない！」

自分に言い聞かせるせよ、言葉にすると、よしっ、と納得して
昼寝になだれ込んだ。

その頃、涼介の部屋のドアには、耳をそばだてる皓の姿。

涼介の声が聞こえなくなった後、足音をさせないようにリビングへと降りた。

「涼介、一体なんだったの？」

リビングのソファに座っていた母親が、無表情気味の顔を皓に向ける。

皓は冷蔵庫からアイスコーヒーの入ったサーバーを取り出すと、コップにそれを入れて母親の前の椅子に座った。

「珍しくも、女の子がらみの悩みみたい」

同じ様にアイスコーヒーに牛乳をたっぷり入れたカフェオレを飲みながら、母親が物珍しそうにふうんと呟く。

「あの子がそう言ったの？ あんたにそんなこと言うなんて、結構重症？」

負けず嫌いの涼介が、兄とはいえ相談事をするとは思えない。

あえてそれをしたなら、精神的に重症な気がする。

皓は母親の言いたい事を理解したのか、持っていたグラスをローテーブルに置いて手を振った。

「涼介がそんなこと言うわけじゃない。あんまり無いんだけど、あいつ女の子がらみで何かあるとさ、俺の顔を見るの嫌がるんだよね」

いい迷惑だけど、と肩を竦める。

——その女顔、目の前で晒さないで

確かに、涼介はそう言った。

母親は無表情に戻った顔を皓に向けて、グラスを手取る。

「ホント、憎らしいくらいあんな女顔よね。私とかわって欲しいくらい」

「俺だって、かわって欲しいっての」

性別を間違えたんじゃないかって程、悲しいほど女顔の二十五歳長男と、男顔の四十八歳母親。

不毛な言い合いに、思わず溜息をつく。

ちなみに女顔の遺伝子を持つ父親は、自分の部屋で仕事中。

「それに俺が出て行った後、なんか叫んでたし。莉子の事は忘れよう！　ってね」

「あら、振られた感じ？　いーんじゃないの？　あの子、恋愛に関しては生意気で嫌な男だから」

母親が言う言葉かと皓は内心苦笑したが、口の悪さは言っても直らないので諦めてそれを流す。

「まあ、あれだけでもれば女性への見方が捻くれるのも、分かる気がする。涼介は、追われる恋愛しかしたことないだろうから。追う恋愛は、勝手が違くて戸惑ってるんだと思うけどね」

「分かった口を聞くのねえ？ その顔でも、恋愛経験は涼介以上？」

「その顔は余計。ただ、少なくとも涼介の気持ちくらいは分かると思うよ。一応、おにーちゃんですから」

にっこりと笑うと、母親は溜息をつく。

母親はさばさばしているといえば聞こえはいいけれど、根っからの鈍感な性格。

天然とまではいかないけれど、あまり気にしない性格だから子供も放任主義。

父親似でよく気がつく皓に、涼介の面倒を見てもらってきたといえはその通り。

内心苦々しい気持ちを味わっていると、皓が溜息をつきながらソファの背もたれに寄りかかった。

「大体、涼介。自分が相手の事を好きだってこと自体、気づいてないんじゃないかなあ。あの言い方だと」

「は？ そこまで、鈍感なの？ あの子」

けれど目を細めた皓に鈍感はおーさんもでしょ、と言われれば口を噤むしかない。

「わからないんだよ、多分。好きの気持ちがさ。自分が好きになる

前に、相手に好かれてたんだから」

その言葉に二人で視線を合わせると、同時に溜息をついた。

——面倒くさいけど、不憫な子……

「おやおや、仲良くなったもんだ」

二人を見たあの土曜日から、もう一ヶ月。

十二月に入って気温はぐんぐん下がり、学ランを着ていないと寒く感じるようになった。

既に自由登校になっていたけれど、大学に合格している生徒は強制登校で修平と俺は週三回、学校に来ていた。

つか、修平は高校の部活にも大学の部活にも出てるから、結構忙しそうだけれど。

今日は補講があるからか受験中の奴らも来ていて、慶太も登校していた。

「莉子さん、本当にバスケ上手いんだよ。もう五回はミニバスやってるけど、昔の勘を取り戻したとか何とか言って駆け回ってる」

修平が楽しそうに、携帯の液晶画面を慶太に見せていた。

見なくても、分かる。何が写ってるかなんて。

それは昨日見せられたからなんだけれど。

「そろそろ恋愛モードに持っていけそう？」

液晶画面を覗き込みながら慶太がにやりと笑うと、修平は携帯を閉じながら片手で首筋を押さえて笑った。

「今は、このままが楽しいかなあ」

恥ずかしそうに告げる修平の言葉に、俺は席を立った。

「よかったじゃん、修平。俺、ちよつと出てくるわ」

座っている修平の頭を軽く叩いてそう言いつつ、教室から出た。

……恋愛モードね。

最近定位置になりつつある屋上で、フェンスに凭れかかりながら両腕をその上に乗せた。

修平は、あれからも何度か莉子と会っているらしい。

ここ最近、修平の口から出るのは莉子の名前ばかりだ。

これじゃ、忘れようにも刷り込まれている気分。

それでも、以前のようにイライラする事はなくなった。

あれだけ気にしていたことが、嘘のように。

多分、俺の中で莉子の存在が小さくなったんだろう。

——きっと、そうなんだろう。

「涼介、またここに来てたの？」

後ろから掛けられる声に、振り向きもせずには溜息をついた。

最近、俺が一人になると傍に来る女。

俺が最後に付き合った、らしい彼女。

未だに、名前さえ思い出せない。

「ねえ、そんなに落ち込んでるなら、また付き合ってあげようか？」
俺の隣に立った彼女は、そんな気がないことがまるわかりの表情で笑う。

「必要ねえ。大体、落ち込んでないし」

顔を反対に向けて、腕に頬をつける。

「そこまで面白いくらいに落ち込んでるのに、見え透いた嘘だね」

——慶太か、こいつは

「つーかさ、お前一体なんなの？　なんで俺んとこ来んの？」

一瞬表情を固めたそいつは、少し顔をくしゃりと歪ませた。

それはすぐに笑顔に戻ったけど。

「んー、別に？　会いたいからーかな？」

「なんだよその疑問系。俺は一人でいたいんだよ、どっか行けって顔を背けたまま片手をひらひらと振ると、そいつはくすりと笑って

フェンスから身体を離れた。

「涼介、私ね」

……まだ、しゃべるか

「付き合ってくれてた時より、今の方が楽しい」

——は？

そむけていた顔をそいつに向ける。

初めて、まっすぐに顔を見た。

「……マゾ？」

「どんな言い方よ」

思わず呟いた言葉に、そいつは俺の肩を軽く叩いた。

「だって、ちゃんと私の言葉を聞いて答えてくれるじゃない。付き合ってた頃は、まったく眼中なかったのにね」

茶色い髪が風に揺れて、白い肌を掠めるように揺れている。

客觀的に見れば、綺麗に分類される姿。

——莉子とは、まったく違う……

「んなこと……ねえよ」

一瞬言葉を切ったのは、その通りだったこと自分で分かっているから。

現に、まだ名前さえも思い出せない。

「別にまた付き合いたいわけじゃないし、過去の事なんて今はどうでもいいけど。やっぱりなんか悔しいじゃない、少しはあんたに後悔してもらわなきゃ」

腰に両手を当てて、ふんぞり返るように笑みを零す。

それは確かに好きな男の前というよりは、友達同士の雰囲気です。ただ単に俺に付きまといただけなのかと思ってた気持ちだが、少し揺らいだ。

「なんだよ、それ」

思わず、口元が緩む。

子供みたいな彼女の行動が、今の俺には優しかったんだ。

「あ、笑った」

俺の顔を見て、嬉しそうに笑ってくれる。

「じゃ、邪魔してごめんね」

くるりと身体を反転させて、歩いていく彼女の後姿をフェンスにもたれながら見つめた。

こういうこと、なのかもしれない。

——因果応報

俺が、莉子で。

しかも莉子のように天然じゃなく、自分の意思で。
付き合いたいって言ってきた奴らを、見ないようにしてた。
どうせ、顔だけなんだからって。

自分を見て笑ってくれたその姿に、自分が重なった。

制服じゃなくて。
眼鏡でもなくて。

顔だけじゃなくて——

“俺”、を見て欲しかったんだ……

奥歯をかみ締めると、反動をつけてフェンスから身体を離す。
そのまま屋上の入り口へと駆け出した。

「おい……っ」

屋上から校内に入るドアに手を伸ばそうとしていたそいつが、俺の
声に振り返る。

すこし、驚いたような表情で。

「どうしたの？」

ノブにかけようとしていた手を下ろして、身体ごと俺のほうに向き
直った。

その目の前で立ち止まり、少し息を整える。

「……悪かった」

追いついたけれど気のきいた言葉が出てこず、ストレートに呟いた。

知らない癖に、どうでもいいように告白を受けて悪かった。

付き合ったくせに、お前を見なくて悪かった。

きっと傷つけただろう、……悪かった――

俺が、莉子の言葉を……態度を気にしているように。

「えっ、え？ 何、どーしたの？」

いきなり謝られた彼女は、驚いたように両手をぶんぶん振り上げる。

「なんでいきなり謝ってるの？ うっわ、涼介じゃないみたい」
その言葉に、うつ……と言葉に詰まる。

いや……そう、そうなんだけど。

俯けていた顔を、横に背ける。

「いい……だろ。別に」

……いや、そーいう事言いたいんじゃないやなくて……。

内心頭を掻き毟りたい気持ちに襲われながら、それでもプライドが頭をもたげる。

彼女は驚いていた顔を笑みに変えて、思いっきり声を上げて笑いだした。

「それが涼介でしょ？ いやだ、謝らないでよ。やー、鳥肌立つちやった」

大げさに両腕を手のひらで擦りながら笑うから、つい釣られて顔が笑う。

「それを言うなら、私も謝るわ。顔だけ目当てでごめんねー」

「はつきり言うなあ、お前」

あまりにもはつきり言われて、いつそ受け入れやすい。

そりゃあね、と彼女は肩を竦める。

「だって、性格悪いもんねー。自分で分かってんでしょ？」

「マジで、はつきり言うな」

呆れたような声で呟くと、涼介ほどじゃないと笑う。

「特別になりたかったのよ、例え見られてなくても。そうなるには、付き合うのが一番って思ったの。……でも」

少し口を噤んで、口元を綻ばす。

「付き合わなくても……こうやって話すの結構楽しいから、私の気

持ちが落ち着くまで付きまといてやるわ」

最後はいたずらっ子のような表情で言い切ると、小さく片手を挙げて身体をドアに向ける。

その腕を、とつさに掴んだ。

ぐつと力を込めると、軽い体は簡単にこっちに振り返る。

少し驚いたように瞬きをしている彼女に、口を開いた。

「何か、好きな事……言え」

「——は？」

意味分らない、と呟く彼女の言葉を遮る。

「だから、悪かったと思うから。何か——」

言う事聞いてやる……、と言外に含める。

彼女は本当に驚いたように声を上げて、俺の手から自分の腕をはずした。

「ホントに変わったね、涼介。これは、莉子さんに感謝だね」

莉子の名前に思わず眉間にしわが寄る。

「うるせえな、莉子は関係ねーだろ」

「素直になればいいのに。じゃあね、今日の放課後一緒に帰ってくれる？　それでおあいこって事でどう？」

私は顔で選んだ事、涼介は適当に返事をした事。

そう続けた彼女に、そんなんでいいのかと聞き返す。

なんか奢れとか、ないの？

「涼介と付き合いたいとかもう思わないし。でも、付き合ってる時

に楽しい思い出なかったからさ。学生らしい望みって事で」

そうやって笑う彼女の頬は、少し赤く染まっでいて。

本当は俺のことがまだ好きなんじゃないかと思う彼女の願いをきくのは、もしかしたら残酷なんじゃないかと自問自答しつつ。

俺は、頷いた。

正門を抜けてしばらく歩いた路地に、地元の小さな公園がある。そこで、待ち合わせて駅へと歩いていく。

強制登校ではあっても、下の学年よりは早く帰るからほとんど周りに学生はいない。

だから教室に帰り迎えにいくといったけれど、彼女は頑なにそれを拒んだ。

「また付き合い始めたとか言われたら、面倒だからね」と、笑いながら。

肩を並べて歩くのは付き合っている間にもあっただろうけれど、どこでもよく相手をしていた俺は“一緒に帰宅”なんてことはしたことがなかった。

「そーいえばさ、涼介」

「ん？」

別に甘さも無くかといって嫌な雰囲気もなく、友達と話すような会話を続けていた時、思いついたように彼女は立ち止まった。

つられるように足を止めながら、少し後ろにいる彼女を振り返る。

「実は私の名前、覚えてないでしょ」

思わず、体の動きが止まる。

なぜなら、それは凶星だから。

俺のその反応に楽しそうに笑いながら、再び歩き出す。

「絶対頭ん中じゃ、あいつとかあれとか、そんな呼び方してたですよ」

同じ様に歩きながら、疑問ではなく断定するように話すそいつにどう返答しようかぐるぐると考える。

さすがに俺でも、「まったく記憶にない」とか言える心臓は持ち合わせちゃいない。

視線を廻らせながら考えていたら、前を歩く彼女がくすくすと笑う。

「ほら、困りなさい〜？ あー、いい気味」

言葉は嫌味のようなけれど、口調も表情もそんな雰囲気を楽しんでいる。

この状況を、少し楽しんでいる自分に気付いた。

向けられる好意を、全て同じものだと思って切り捨てていた。

顔だけに引き寄せられて、顔だけを目当てに彼女になりたがる女。

よく話せば、普通の……友達として、話せるのに。

馬鹿みたいに思い込んで、見ないようにしていた。

だから、相手からも顔への好意以上のものを返してもらえなかったんだ。

当たり前だ。

こっちが、好意を持つとしなかったんだから。

なのにずっと、顔だけ目当ての奴だから、すぐに別れを切り出されるんだと思ってた。

「涼介？」

黙ってしまった俺に、怪訝そうな声が掛かる。
俯けていた視線を上げれば、自分より頭一つ分下にある彼女の顔。
視線を合わせながら、口端をあげた。

「わり、ちつとも思い出せねえや」

知ったかぶりをするんじゃないくて、格好をつけるんじゃないくて。
知ろつとするならば、正直に。

俺の言葉にきよとした顔を見せた彼女は、次の瞬間噴出して笑い声を立てた。

「ホント、涼介変わったわ!」

「そこまで笑うか?」

突っ込みながら、つられるように自分も笑う。

恋愛でも、そうじゃなくても。

相手を知ろつとする事、それが大切だと……気付かされた。

「お前、名前なんて言うの? 教えてくんね?」

一通り笑って落ち着いてきた声で、彼女を見下ろす。

まだおかしそくに腹をさすっていた彼女は、一度深呼吸をして俺を見上げた。

「あのね、私の名前は——」

そこまで言った時、彼女の視線が不自然に揺れた。
何か複雑な色を浮かべて、俺から視線を逸す。

「どうした？」

満面の笑みだったその表情が、なぜ一瞬にして翳ったのか少しも分からなかった。

ただ彼女はもう一度視線を俺の後ろに移すと、口端をあげて笑みを作った。

「何してるんですか？」

俺の横をすり抜けて、後ろへと駆け出す彼女を視線で追う。

音符でもついているような、弾んだ声。

同じく弾むように駆けるその先には。

「莉子……」

ベンチに、莉子が座っていた。

初めて会ったときと同じように、腕を組んで背もたれに重心をかけながら。

俺の視線の先には、ベンチに座る莉子の姿。
見た途端、心臓が、音をたてた。

莉子の目が、嬉しそうに俺を見ている。
たったそれだけの事で。

一ヶ月前、真横に立っても俺を映さなかったその目が、確実に俺を
捉えていた。

莉子は駆けてくる彼女と、その後ろに立つ俺に嬉しそうに手を振る。
「凄く素敵な制服カップルだと思ったら、涼介さんと同級生の方だ
ったんだね！」

制服カップル……

つかさ。制服は、要らないんじゃないの？

てか、なんでここに莉子が……

疑問に思いつつ辺りを見ると、道路の向こう側にいつも帰りによる
ファストフードの店があった。
そこを見て、莉子のいるベンチを見る。

ああ、なるほど。

内心納得して、莉子達の方に歩き出す。

初めて会った時と同じ態度……だけじゃなくて、場所も一緒だったか。

鼓動を早める心臓を意識して正常に戻そうと努力しつつ、ゆっくりと足を動かした。

彼女と莉子は楽しそうに会話を交わしていて、とりあえずその横に立つ。

「ああ、やっぱり学ランにはセーラー服よね！　しかも今時逆行昔ながらのセーラー服！！　素敵！」

やっぱり、制服の話かよ。

「えー、でもダサいですよこれ。いつの時代って言いたくなるくらい」

袖の部分を軽く引っ張りながら、彼女は眉を顰める。

莉子はそんな彼女を見上げると、甘いわ、と人差し指を立てて横に数回振った。

「紺と白のセーラー服。それに、カーディガン。このスタンダードな組み合わせを素敵に着こなすのがいいんじゃない！」

スタンダードな組み合わせって、誰にでも似合うのが前提なんじゃない……？

多分同じ事を思っているのだろう苦笑気味の彼女を、莉子はキラキラした目で見上げていて。

指がうずうずとしているのが、目の端に映った。

うわ、こいつ絶対写真撮りたくてうずうずしてやがるっ。

「ああ、でも本当に涼介くんは制服似合うわねえ」

それでもやっぱり言い出せないのか、視線を俺に移してにこにここと笑みを零す。

「あれから結構制服男子を見たけれど、まだ涼介くんの上に行く子には会えないわ」

あー、なんかもう、発言が変態くさい。

——なのに

「あつそ。それはどーも」

あえてそっけなく、なんでもなく返す言葉。

俺、阿呆だ……

意識、凄えしてるのもろわかり……

「やだなー、ご謙遜」

じゃないか、莉子、相手じゃ。

「で？ お二人は恋人さん？」

「なんで、さんづけ」

思っても無いところを突っ込まれたのか、莉子は一瞬きょとんとしてから笑い声を上げた。

可愛い、高い声。

「気にしないで、私、なんでもさん付けする癖があるの。警察屋さんとか」

いや、さんだけじゃなくて、屋って……。警察はなんかの店か。手錠でも売るのが、違反切符買取かっ

突っ込もうとしたけれど、脱力した俺に突っ込む気力がなく。

「ねーねー、恋人さんなら写真、……嫌じゃないよね……？」

そつと両手で出してきた、必殺莉子のデジカメ。

「すんごく素敵なカップルなんだもん！撮らせてっ、お願い！！」

その言葉で、まったく自分が莉子の恋愛感情に影響を与える男じゃない事が丸分かりで。

しかも何がむかつくって……

視線を下に向けて、学ランを見る。

マジでこいつ、制服着てねえと俺ってわかんねえんだな。

現に、制服着てれば一発で気付くくせによ。

おまけかよ、制服についてる食玩的なあれか？

っ！か、もうデジカメまで出してる莉子に、拒否はきかねえんだろ
うな。

溜息をつきつつ、諦めて頷こうとした時、

「莉子さん、写真はダメですよ」

隣に立つ彼女から、やんわりとした返事が返された。

……ノリ的にOKするかと思ったら。

思わず彼女を見下ろす。

反対に莉子はデジカメを両手で持ったまま、縋りつくような視線を彼女に向けていて。

「ダメ？ 凄く素敵なのにーっ、大人だけどこで駄々捏ねてもダ

メ？」

どんな脅しだよ。

「ダメですよ。私写真嫌いなんです」

「えー、そんなー」

それでもなお言い募ろうとした莉子に、彼女は満面の笑みを零した。

「もし隠し撮りとかしたら、子々孫々呪いますから」

表情と言葉がちぐはぐの彼女を、莉子は瞬間冷凍でもされたかのように見上げたまま固まった。

しばらくして彼女が口を開いた。

「じゃ、私たち帰りますね？」

瞬間冷凍から溶けつつある莉子はぎこちなく口端をあげながら、デジカメを鞆にしまいこむ。

「うん、気をつけてね」

音がしそうなほど緩慢な動作で片手を挙げる莉子を残して、俺達はその場から歩き出した。

そのまましばらく黙ったまま歩いて。

途中の分かれ道で、やっと彼女がこっちを向いた。

「ね、涼介。本当は莉子さんの事好きでしょ」

その笑顔は、昼に見たままのいつもの表情で。

さつき莉子を見つけたときの表情と比べて、何か違和感を感じながら口を開いた。

「別に」

ふいつと顔をそらす。

「ふうん？」

彼女は小さく呟くと、一・二歩俺に近づく。

「涼介、莉子さん見た途端、どんな顔したか自分で分かってる？」

「どんな顔……って」

別に、普通の……と続けようとした俺の言葉を、彼女が遮る。

「ねえ、涼介は莉子さんの事どう思ってるの？」

どうって……

「別に、ただの制服マニア……」

「馬鹿ね、ホント馬鹿。ちゃんと素直に話しなさいよ。気になってるんでしょ？」

馬鹿を続けられて少しムツとした俺は、視線を横にそらした。

「何でそこまで言われなきゃなんねんだよ」

「ムカツクから。さつきデジカメ出された時、写真撮られてもいいって顔したでしょ？ 何で涼介の好きな人に、涼介と撮られなきゃなんないのよ」

——、え？

「いや別に、言い出したらきかなそうだから——」
他意はないと続けると、呆れたような表情が返ってきた。

「いつもの涼介なら、絶対断ってる。少し考えなさいよね、プライド守ったって何にもならないんだから」
まくし立てるように、一気に言い放つ。

何も言えずただ見返すと、だいたい……と小さく呟いて俺を睨み付けた。

「今、自分がどんな顔してるかなんて、全然分らないんでしょ？」
それだけ言っと、俺の返事も待たず走り去ってしまった。

その後姿は、その目は、その表情は。

怒っているようで……でも、悲しそうで。
俺は声もかけられずその後姿を見送った。

「あ、おかえ……り……？」

家に帰りリビングにも行かず自分の部屋へと階段を上った俺は、丁度部屋から出てきた皓と鉢合わせになった。

「ただいま」

なぜか疑問形にされたそれに短く答えて、さっさと自分の部屋に入

る。

上着だけ脱いで放り投げると、倒れこむようにベッドに沈んだ。

少し埃くさい布団に、顔を押し付ける。

なんで、あんな顔するんだよ。

別に写真撮られるくらい、いーじゃねえか。

溜息をついて、息苦しくなった顔を横に向けた。

「……」

「——やあ……」

そこには、ドアからこっそりと覗く皓の姿。

「——やあ？」

鸚鵡返しのように、皓に対して呟く。

人の部屋のドアを開けてこっそりと中を覗く理由は、何？

口を開いて文句を言ってやろうと思ったが、なんだかそんな気力も無く小さく息を吐いて布団に顔を押し付けた。

「あれ？ 何も言わないの？」

言われない方が恐ろしいとでも言うように、ドアの隙間から身体を部屋の中に入れた皓は、ベッドの脇に膝を落とす。

「くそ生意気な俺の弟が、何の反応も示さないなんて。まずいよ、槍が降るよ、少なくとも明日は台風だ」

わざとらしく大げさな声を出す皓に、布団から顔を上げて横を向く。

「……十二月に台風きたら、異常気象過ぎて笑えねえ。つーかなんで皓がいんだよ、平日の六時だぞ？ リストラ？」

「明日から出張、故に今日は定時前に取引先から直帰」

社会人の、話す、言葉……だな。

なんでもないように話す皓の言葉に、ふと莉子の姿が脳裏に浮かぶ。二十三歳、大学院生。助手もしている社会人。

ああ、皓が相手なら……。二十五歳の皓が相手なら、恋愛感情を持つてくれるんだろうか。

——……。？ は？ 恋愛感情？？

ふと浮かんだ考えに自分自身驚いて、がばっと身体を起こした。隣では皓が、何事かと瞬きをしながら俺を見ている。

だめだ俺。

何を、考えて……

「あー、涼介。お前、どーしたの？」

「は？」

まだ自分の考えから立ち直れていない俺は、呆けたように皓に視線を向けた。

「どーしたって？」

鸚鵡返しのように聞き返すと、皓は俺の顔を指差して肩を竦めた。

「どーしたの、その顔。酷い表情」

——今、自分がどんな顔してるかなんて、全然分らないんでしょ？

彼女に、最後に言われた言葉。
それを、思い出す。

「そんな、酷い……？」

自分がどんな顔してるかなんて、ちつとも分からねえ。

「うん、酷い」

皓は、あっさりと頷いた。

その言葉に、起こしていた上半身がそのまま布団に沈み込む。

彼女と一緒にいた時、皓が言うほど酷い顔していたって事か？
なんで？

「あのさ、涼介」

ぽんぽんと、頭を撫でる感触。

「たまにはさ、おにーちゃんを頼ってみない？ 多分、涼介の悩み
って自分じゃ解決できないよ」

「——なんで」

どうして、断言できるんだよ。

少し非難めいた声音で聞き返すと、前に聞いたような答えが返ってきた。

「追いかけてばかりでちゃんと恋愛と向き合ってこなかったんだから、涼介にはきつと分からないと思うけどね」

皓の言葉に、俺は何も言い返せなかった。

……それは、慶太から言われた言葉と同じだったから――

「……涼介、さいてー」

なんか、ひらがなのような口調で言われた気がするけど、まあ、いい。

今までの経緯を説明した後の皓の反応は、なんとなく想像していたものと同じだった。

呆れた表情と、呆れた言葉。

眇めた目が、綺麗な顔の中で目立って冷たい。

「最低って……」

なぜか皓の前で正座しながら、両手を膝の上でぎゅっと握り締める。

「だってそれ、男としてって言うか人として、さいてー」

「そこまで言うか」

「言う」

断定の上に断定を重ねられるという、あまり皓から受けない仕打ちに若干言葉を詰まらせる。

いつも俺が上で、皓が下出にでていたから。

だから、本気で俺がダメと言われている気がして、へこむ。

皓は前のめり気味だった体勢をもどして、後ろの壁に背中をつけた。

「とりあえずその今日の女の子？　まだ、名前思い出せないの？」

「……まったく」

もう少しで聞けるはずだったけど、彼女が莉子を見つけたタイミングが重なって聞くことが出来なかった。

皓は小さくため息をつく、まあいいか、と呟いた。

「涼介はさ。今まで誰か好きになったこと、ないの？」

——好き、に？

好き？

腕を組んで眉を顰める。

いや、それくらいは……

ぐるぐると昔の記憶を掘り起こしてみる。
その結果。

「記憶にない」

「マジですか——」

苦笑気味の口元が、ひくりと震える。

「追われる恋愛って言うか、恋愛自体したことないって？ マジでー？ 涼介いくつだよー。おにーちゃん、そんな風に育てた覚えないよ」

「育てられた記憶ねえ」

「はいはい。まあ、そんなことだろうとは思ってたんだけどさ。好きって、どーいつのか分かってないでしょ？」

「んあ？」

思わず威嚇の声が出る。

「好きがどーのとか、そんなくらは分からあ」

これでも十八歳、男子高生なめんなよ。

腕を組んだその格好のまま、ふいつと顔をそらす。

そこまで俺は馬鹿じゃない。

「じゃー、涼介の考える好きって何よ」

ふてくされたような俺の態度に、皓はやっぱり呆れ気味の声。

ちらつと皓に視線を向けて、すぐにそらす。

呆れていつつも興味津々のような、複雑だけど確實俺的面白くない顔。

この女顔にそんなこと聞かれたくないし。

「つーか、こんなことなんで兄貴としゃべんなきゃなんねんだよ」

「そりゃ、涼介が不甲斐ないから。ていうかー、ホントはまったく思いつかないんじゃないのー？」

「わけねえだろっ」

「じゃあ、どうぞー」

と、やんわりとした口調で返事を促されて、仕方なく口を開く。

「あー……あれだろ？ 人押しのけてまでそいつと一緒にいたいとか、周りの迷惑考えないくらい我を通すとか」

「……はい？」

一瞬、間をおいて聞き返してきた皓に首を傾げる。

「だから毎日メールしないとダメとか、他の人を蹴落としても手に入れたいとか、相手の迷惑お構いナシとか」

組んだままだった腕を下ろして、溜息をつく。

「人を好きになるのって、はた迷惑だよなー」

一人ごちてから、皓に視線を移した……ら。

「——皓？」

なぜか、瞬きもせずまん丸に見開いた目で俺を見ていた。

何も答えない皓にもう一度呼びかけると、溜息交じりにその綺麗な顔を俯けた。

「……リヨウスケケン……」

「ん？」

小さな呟きに、耳をそばだてる。

「君は一体、どんなオツキアイをしてきたのかね」

——？

「他の奴は、違うのか？」

「多分、涼介みたいに答える人って、少数派だと思う」

——

「え、マジで？」

ゆっくりと頷く皓を見て、瞬きを繰り返す。

「だって、今まで付き合った女って皆そんな感じ……」

ぶつぶつと呟く俺の肩を、ぽんぽんと叩いて溜息をついた。

「いや、まあ。全部がはずれじゃないとは思っけど。んー、なんていうの？」

腕を組んで唸り声を上げた皓は、しばらくして頷いた。

「いろんなこと言っても無駄だと思うし、まーなんていうか……」

「その人の事ばかり考えると、もっと会いたって思うとか、周りの男に嫉妬を抱くとか！」

「……」

思わず顔を上げて皓を見る。

なんか今、皓以外の声が聞こえた気が……

「……母さん」

溜息と共に皓がドアの方に視線を向けると、さっきの皓のように母親が隙間からこっちを伺っている姿。

「何してんだっ」

何、今までの会話聞かれてたって訳？！

焦って母親に怒鳴ると、開き直ったのかドアを思いっきり開けて俺たちの横に座った。

「だってあんた、めったに聞けない男子高生恋の悩み！！　これは聞いておかないと、もったいないでしょ！？」

「はあっ？　つか、恋の悩みとか言うな！　寒すぎるっ！」

「してたじゃない！　相談してたじゃない！　よりもよって、女顔の皓に話してたじゃない！！」

「自分で産んでおいて、“よりもよって女顔”はないんじゃない

？ つーか、母さんは黙ってて」

怒鳴りあいに変わった俺と母さんの会話を、のんびりと皓が遮った。

「こんなに面白いのに！ 後で、絶対ネタに出来るのに！」

「ネタにしないの、まったく」

諫める皓、拗ねる母親。

やばい、自分を見ているようだ。この状況。

いやしかし、俺はここまで子供じゃないはず――

「とにかく、涼介」

まだぶーすか何か呟いている母親を余所に、皓は俺を見た。

「その人のことを誰にも渡したくないって思ったら、それは少なくとも、友達以上の感情だよね？」

綺麗な顔で、にこりと笑う。

「友達以上の感情？」

聞き返す俺の言葉に、皓は頷いた。

「そう。あとは、自分で考えようね」

「……自分で」

自分で、考える……か。

押し黙るように拳を口に当てた俺の顔を、母親が横から覗きこんだ。
「それ、“りこさん”のこと？」

「……っ、え？」

驚いて、目を見開く。

「え、ちょ……なんでその名前……」

知ってんの……？ と、続けようとした俺の言葉は、皓に遮られた。

「あ、て言う事は、今日一緒に帰ってきた子の名前知らないんだから、その子は本命じゃないのか」

「は？」

母親から、皓に視線を移す。

「だって前に叫んでたでしょ？ “よし、莉子の事は忘れよう！”
って」

――
一気に顔に血が上る。

勢いのまま、立ち上がって皓をにらみつけた。

「おっ、お前、盗み聞き……っ」

皓はしれっと、首を傾げる。

その隣で母親が、ぽんっと右の拳を左の手のひらに打ち付けた。

「りこさんがダメだから、元力ノってこと？ 涼介、最低ー！」

……っ

「誰が、そんなことするかああっ！！」

沸騰しつつあった頭の血が大噴火を起こしたかのごとく、俺は部屋から飛び出した。

「……若いつて、いいねえ」

「いや母さん、焚き付けすぎだから。涼介のこと」

「何いつてんのよ、日頃可愛くない涼介なんだからこれくらい弄り倒さないと。かーさん、毎日暇なんだから」

「子供を、暇つぶしに使わないように」

俺の部屋で、そんな会話が交わされている事など、まったく知らずに。

「あれ？ 莉子？」

ひたすら走って、走って。

頭に血が上つてるときの行動って、まったく意味ねえなど、やっと立ち止まった時に思った。

そして無意識に向かう場所なんて、まったくもってなれた場所で。

道の向こうに、莉子が見える。

さっきと同じ姿勢で、腕を組んでる。

学校への通学路、走ってきちまった。

——アホだ……

大きく息をついてファストフードの横、いつもの花壇に寄りかかる。十二月だというのに上着も着ずにいる俺の姿を、目の前を歩く人がちらりと視線をよこすのを無視してもう一度息をついた。額の汗を、シャツの袖で拭う。

なんでわざわざここに来るかな、俺。

そう思いながらも、視線は莉子を追う。

腕を組んだままじっと人ごみを見つめているその視線は、何かを見つけるとそれをじっと追い、

多分視界から消えるとまた違うものを探す。

それを繰り返していて。

その視線をなぞると、ほぼ制服を着た高校生に行き着くから、面白
いというよりは脱力する。

凄え、単純明快・

じっと莉子の様子を伺いながら、両腕を前で組む。

ずっと、考えないようにしてたけど。

ずっと、気付かない振りしてたけど。

ずっと、何か理由つけてたけど。

俺、やっぱり莉子の事、好きなのかな。

俺の顔をまったく意識しなかった、初めての人。
俺よりも、制服を選ぶ人。

それだけに、まっすぐで。人との会話に、裏がない。
無邪気すぎるのも、ちよつとあれだと思っけど。

——その人の事ばかり考えると、もつと会いたいって思うとか、
周りの男に嫉妬を抱くとか

ふと、母親の言った言葉が脳裏に浮かぶ。

ずっと、莉子のこと考えてる。

最初は、自分に惚れさせてさっさと捨ててやるつもりだった。
プライドを、守りたかった。

自分の顔に嫌気を感じながら、それをプライドにしていた。
だって、それしかないと思ってたし。

寄ってくる奴、皆、顔目当てだったし。

「ん？」

莉子がおもむろに立ち上がった。

帰るのかな？ と見ていたら、しゃがんで何かを拾い上げる。

が、その途端横のバッグが倒れて、本とデジカメが飛び出して地面に落ちた。

思わず腰を浮かせると、莉子の傍に小さな男の子が駆け寄ってきたのを見て再び花壇にもたれる。

莉子は男の子に何か手渡すと、反対に男の子は落ちた本とデジカメを拾う。

男の子の落とした物を拾おうとして、自分の荷物を落としたって所か。

見てて飽きないな、ホント。

さっきまで例の彼女の事とか、莉子の事とか悩んでくさくさしてたのに。

莉子を見てたら、そんなこと思い出しもしない。

男の子は珍しそうにデジカメをずっと見ていて、それに気づいた莉子がかメラを構えて何か合図をする。

男の子は嬉しそうに、ピースを両手でしながら写真におさまった。後ろからお母さんらしき人がやってきて頭を下げて男の子を連れて行く。

その手には、莉子が差し出したメモ紙をらしき紙切れを握り締めて。

莉子は小さく手を振り終わると、再びベンチに座ってさっきと同じ体勢に戻った。

なんていうか、莉子らしい。
莉子の事ちつとも知らないけど、それでも彼女らしく思える。
個性というか、それが彼女なんだろう。

「幸せそうだね」

——っ

いきなり話しかけられて、体がびくついた。
音がしそうなほどぎこちない動きで首を横に向けると、にやりと笑った慶太の姿。

「……なんで、ここに……」

一瞬、息、止まった。

どんだけびびってるのかと情けなくなりながら、それでも何とか口を開く。

「ね、幸せそうだよ。涼介」

俺の問いに答える前に、慶太は花壇に腰を下ろしてもう一度同じ事を言った。

その視線が莉子に向けられているのに気付いて、小さく息を吐く。
「そうだな。莉子、楽しそう」

なんでもないようなそんな声音で返事をする、慶太はくすりと笑っていきなり俺の顔の前に携帯を突き出した。カシャ、という音と小さく光るフラッシュ。

「え？」

びつくりして慶太を見ると、慶太は携帯の画面を目の前に突き出した。

「幸せそうでしょ」

「……」

画面には幸せそう……というか、よく言えば微笑んだ、悪く言えばにやけた男の顔。

つか、俺の顔……?!

「何、この顔」

思わず、突っ込んだ。

自分のだって理解してるけど、なんか、納得がいかない。

こんな顔……

「幸せそうでしょ、涼介の顔」

「嘘だ、こんな顔、してねえ……」

自分でも見た事のない表情に、画面を凝視する。

「してるじゃない。気付いてないの？ 莉子さんを見てるときの顔」

——涼介、莉子さん見た途端、どんな顔したか自分で分かってる？

あの、彼女の言葉が浮かぶ。

……こんな顔、してたのか。

手のひらで、口元を覆う。

こんな顔で、莉子を見てたのか。

それを、……あの彼女に見せてたのか。

「ね。最低な涼介くん」

笑いながら携帯をしまつ慶太の言葉に、顔を上げる。

「……、お前」

「なに？　なんか、文句ある？」

いつもの笑顔のはずなのに、何か冷たい空気を感じる
「お前、何か知ってるのか？」

だつて、おかしい。

こんなにタイミングよく、彼女に言われた事を思い知らせるような、
俺に気づかせるような行動。

慶太は浮かべていた笑顔を消して、目を瞑る。
「あのさ……」

そしてすぐに目を開けて、口角を上げた。

「俺の幼馴染、あんま苛めないでやって」

……え？

「お、さ、な……なじみ？」

その顔は、笑みではなく、寂しそうな苦笑。

「幼馴染って、あの、彼女が？」

「……そう、名前さえも覚えていない、涼介の元彼女。ちなみに、涼介と別れる時に言った言葉は、俺の入れ知恵」

別れる時に言った……？　って――

「あの、不感症とか言う奴？」

「そ。短くて、男的一番ダメージの大きい言葉を教えてみました」

「なんだ、それ」

女に言わす言葉が、それ。

俺の言葉の意味に気付いたのが、肩を竦めてくすりと笑う。

「涼介を顔から好きになったから。あいつにも、お仕置き」

それって……

「涼介が、そういうの嫌がるの知ってたから。だからあいつにも言ったのに、告白するんだって息巻いて人の話も聞かなかった」

そのまま、視線を莉子に移す。

相変わらず、腕を組んだままじっと人ごみを見ている姿。

「おかしいと、思わなかった？　別れた翌日に俺が既にそのこと知

つてたり、涼介が一人にいるときに限って、彼女が現れたり」

「見張られてるのかと、思ってた」

ストーカーちつくな感じで。

「あはは、そうだよ。普通そう思うよ、うん。俺も、泣きつかれた時、つっぱねたもん」

そう言って息を吐き出す慶太は、最近見る飄々とした雰囲気はなく、何か吹っ切れたようなそれでいて寂しそうな。複雑な表情を浮かべている。

「莉子さん見て、悔しくなったんだって。隣にいたはずの自分は見えてくれなかったのに、涼介のことなんかまるで意識していない莉子さんを、無意識に追いかけているのがさ」

「そんな……こと」

「ないって見える？」

俺の言葉を遮るように、慶太は続けた。

「彼女の望みは、一つだけなんだ。多分それで気持ちの整理がつくと思うから、叶えてやってくれないかな」

莉子から俺に視線を戻すと、肩を竦めた。

「分かる？　どんな、望みか」

その言葉に、少し逡巡して頷く。

「多分、分かる」

彼女がこだわっていた事、それは、多分――

慶太は俺が答える前に、笑みを浮かべた。

「俺んち知ってるでしょ？　その右隣が彼女の家」

それだけ言っと、花壇から立ち上がった。

「じゃ、ね」

「って、待てよ慶太」

今にも歩き出そうとした慶太を、慌てて引き止める。

「つーか、なんでそんなことばらすんだ？　言わなきゃ、分からないだろ？」

彼女の手助けをしたとか、そんなこと。

言われなきゃ、全然気付かなかった。

慶太は半身だけこっちに向けるように、振り返った。

「大体、ここに俺が来る事自体、出来すぎてると思わない？」

……そういえば。

頷きそうになって、苦笑する。

「いや、慶太ならこのタイミングでも現れかねない」

慶太は少し噴出すと、何それ、と笑う。

「涼介に八つ当たりしちゃったって、部屋に駆け込まれたんだよ。さっき」

俺の部屋は駆け込み寺じゃないんだけど。

「彼女から話を聞いて、涼介だったら、自分の気持ちを確かめにここに戻ってきてそうだなって思ったから来てみたんだ。案の定だったね」

——単純という事ですか。でも、これは偶然というかなんとか。家族に遊ばれなきゃ、来なかったかも……いや、そうじゃなくても来たかな。きつと

さっき、莉子に対して思っていたことを言われて、あはは……と乾いた笑いを零す。

「それに涼介も悩んでいるみたいだし、そろそろ止めたらって言うてみた。そしたら彼女、頷いたよ。もう、充分だって。もういいって言うてた」

だから、種明かし。と、呟く。

脳裏に浮かんだ一つの可能性に、口を開く。

「もしかして、慶太が俺に結構強く当たってたのって……」

彼女と別れた翌日から、元からだったけれどそれでも慶太の言葉がきつくなつた事を思い出す。

莉子に声をかけたのだって、俺がらみで、別に慶太に何か利益があるわけでもなく。

俺をけしかけて、言い方悪いけど……もしかしてその彼女のやり返し、してた？

言外に含めた俺の視線に、ごめんね、と呟く。

「涼介が周りにとる態度、傍にいるから理解してる。伊達に三年間、友達やってないし」

そのまま、すつ……と右の人差し指で何かを指す。

「だから、涼介が鈍感なのも知ってるよ。俺はどっちも応援しないからね、中立って事で」

慶太の言葉を聞きながらその指先が指し示す方へ、視線を動かしていく。

「俺は自分の事で手一杯だから。彼女の出した問いかけの答えは、自分で見つけてね」

「……あ？ ああ」

それに答えながら、指先の示す先の光景に、思わず体が動いた。

「頑張ってるねー」

慶太の声を背中で聞きながら、莉子の元へ走り出した。

声までも、想像できそうに悔しい。

はじかれるように駆け出したその先には、莉子と修平の姿。
立ち上がった莉子の手には、修平がさも当たり前のように自分のそれを重ねる姿。

一ヶ月前、同じ様な場所で同じ様な光景を見たことを思い出す。
花壇の後ろに隠れて、出て行く事も会話に混ざる事も出来ずに二人を見送った。

もう、見たくない。そんな光景、何度も目の前で見せられてたまるかっ！

「……っ、ちよつと待て！」
ぐっ、と莉子の手をひつたくる。

「……え？」
「涼介？」

呆気にとられたような、二人の顔。
そっくりな反応に、何かイラつきが募る。

「どうしたの、涼介くん。さっき帰ったんじゃない……」

「用があつて、戻ってきたんだよ。つーか、何？　どっかいくの？」
途中から修平を見上げて言うと、素直に“うん”と頷く。

「何か食べにいきませんかっ、聞いて。それで、了解を得たところだよ」

そう言つて、にこりと笑う。

なんだよ、その邪気のない顔！

いや、ないんだけどさ。本気でないんだけどさ、こいつにそんなものなんて！

「別に、手とか繋がなくてもいいじゃねえか……」

素直な修平の反応に、思わずぶつぶつと呟くように言葉を返す。

「莉子さん小さいからはぐれないようにって思ったんだけど。……

じゃあ、涼介は？」

「は？」

聞き返されて、同じ様に聞き返す。

「何が？」

修平は笑んだ表情のまま、俺の手元に視線を落とした。
それを辿るように、俺も自分の手元を見る。

莉子の手を掴んだままの、自分の手。

思わず勢いで掴んだものの、離していなかったことに気付く。
ていうか、離す事も思いつかなかった。

少し視線をずらすと、同じ様に手元を見ている莉子のつむじが見え

る。

……離したくないんだけど、離さなきゃ、ダメかな。これは。

沈黙が漂う俺たち三人を、横目で見ながら通り過ぎていく人たちの視線も気になってきた。

どうする、俺。

離したくない。

けど、離さなきゃいけないような状況。
でも、離すタイミングが掴めない！！

どうする、俺！ を頭の中で繰り返していたら、いきなり莉子が俺の手を振りほどいた。

その行動に、頭から冷や水をぶっ掛けられたように硬直する。
繋いでいたはずの手が、凄く寒い。

「——り、こ？」

呻く様に呟くと、莉子は少し怒ったような顔で俺を見上げた。

「涼介くん！」

莉子の声に、思わずびくりと肩を震わす。

「はいっ」

やっぱり、修平の方がいいって……こと？
俺、お邪魔な感じ……？

そう心の中で呟いていたら、ふわりと首元が温かくなった。

無意識にそれに手をやると、見えるのは薄いベージュのストール。

「……え？」

意味の分からない状況に、ストールから視線を外して莉子を見る。

莉子は怒ったような口調で、右の人差し指を立てた。

「こんな寒空に、そんな薄着で歩き回っちゃ風邪ひくでしょ？ なんで、上着を着てこないの?!」

「え？」

思わず、ストールの端を手のひらで掴む。

拒絶の言葉が飛び出すと思っていたその小さな口から出てきたのは、俺を心配する言葉。

莉子は、まったくもうと、ぶつぶつ言うとき再び俺を見上げる。

「あと、私は年上！　さん付け忘れてるし！」

そこかよっ

思わず噴きそうになって、口を手のひらで押さえた。

「大体ねえ、……大体……！」

何か怒りを堪えるようなその姿に、口元を押さえながら次の言葉を待ってみる。

ダメだ、笑い出しそうだ。

頼むから、変なこと言わないでくれよ……？

「大体、何で学ラン着てないのよ！ さっき着てたのに！ 私の目の保養を返せっ！！ 写真撮らせろっ！！ ついでに、眼鏡も持ってこい！」

莉子は自分の要望を一気に言い放つと、もうつ、と両腕を組んでもいっきり睨みあげてくる。

俺はその視線を受け止めながら、限界を突破した。

「……ぶっ、ぶはははははっ！！」

そっちか！ その怒りは、そこか！！

堪えきれなくなつて、盛大に笑い声を上げる。

その大声に、莉子が怒りを消してきよとした表情になった。それさえも、愛しくて面白い。

「……はっ？」

自分で思った感情を、目を細めてもう一度呟く。

愛しい。

「そうか……」

愛しいって、こんな些細な事で感じるものなのか。

制服好きで、眼鏡好きで、人間観察が好きで。
二十三歳で、大学院生で、助手をしてて。

たったそれだけしか知らない。

しかも会って話したのは、たったの四回目。
でも、それでも――

「修平」

莉子から視線を外して、修平を見上げる。

「ん？」

修平は複雑そうな表情のまま、俺を見る。

にやりと笑って、もう一度莉子の手を握り締めた。

「悪い、俺も参戦」

修平は一瞬目を見開いてそれを細める。

「……そっか」

そう言って、空いている方の莉子の手を掴んだ。

「こればかりは、負けたくないなあ」

いつものほんわか笑顔に戻った修平は、ね？、と莉子を見下ろす。

莉子は何を聞かれてるのか意味が分からないらしく、ただ握られた
両方の手を軽く持ち上げた。

「何で、手、繋ぐの？」

ずり落ちそうな肩にかけたバッグを気にしながら、困ったような声
で俺たちを交互に見上げる。

「莉子が小さいから」

「莉子さんがちっちゃいから」

同時に答えた俺たちの言葉は、異口同音状態で。

「何それ、二人が大きいだけじゃない」

むうつ、と膨れる莉子に思わず笑う。

莉子の事ばかり、考えて。

莉子に、もう二度と会うことはないって言われて落ち込んで。
莉子の傍にいる修平に嫉妬した。

この気持ち、好きってこと。

てか、どーでもいいや。“好き”の意味とか理由とか。

誰にも、触れて欲しくないと思う。

傍にいるのは、自分でありたいと思う。

だから、伝えるんだ。

「莉子」

頬を膨らせたまま、何？ と俺を見上げた莉子に、笑いかける。

「俺、莉子のこと、好きだよ」

「——え？」

膨らませていた頬が、しゅつと平たくなる。

まん丸の目が、大きく見開かれた。

修平はずるいなあと呟きながら、莉子の意識を向けさせるためか握った手を軽く持ち上げた。

「ね、莉子さん。俺も、莉子さんの事、好き」

「は？」

突然の告白に、口をあけて呆けたように俺たちを見上げた。

さっきまでのふくれっつらはどこへやら、大きい目をさらに見開く。

公開告白のようなこの状況。

通行人の興味を惹くのは、当たり前で。

さっきまでの盗み見のようなものではなく、何人か立ち止まって成り行きを見守っている。

その中で、男二人に告白された莉子は、今まで見たことのないような満面の笑みを浮かべた。

「私も、大好き！」

叫ぶように、嬉しそうに笑う、莉子。

それはどっちを？ という周りの雰囲気、俺と修平は返ってくるだろう答えを予測してそれを待つ。

「二人とも、可愛いんだから！ そんなに好いてくれているなんて、気付かなかったわ」

いや、だからどっちを！ という、野次馬の齒軋りが聞こえそう。

莉子は俺と視線を合わせて、にこりと笑う。

「私はねえ、涼介くんの制服姿大好き！」

いつもの右の人差し指を立てるポーズをしたいのか、俺の捕まえている右手がふるふるとするけど一切無視。

制服姿限定だけど名前が出て、通行人が莉子の視線で俺の方に決まったかと動き出そうとしたその時。

莉子は修平の方を見て、同じ様に笑いかける。

「でね、修平くんのユニフォーム姿が大好きよ！」

「え?!」

俺たち以外から、声上がる。

それは見ていた通行人の一人で。

目が合って、気まずそうにそらされる。

きつと周りも皆そう思っただらしく、啞然とした顔で莉子を見ていた。でも、当の本人は我関せず。

手を引っ張って、離すように訴えてくる。

俺と修平は笑いを堪えながらその手を離すと、莉子はがさごと靴を探った。

目当てのものを見つけたのか、両手でそれを構えらとぱつと俺たちに向ける。

「だから、写真撮らせて!!」

思った通りの言葉に、俺と修平は盛大な笑い声を上げた。

翌日、自分のクラスから間に三つ教室を挟んだクラスに、放課後、顔を出した。

覗き込んで目当ての人を見つける。

そいつは誰もいない教室の窓際の一番後ろの席で、ぼうつと窓の外を見つめていた。

そのまま入り込んで、彼女の横に立つ。

「お前、随分いい席に座ってんのな」

俺の声に何気なく顔を上げた彼女は、目が合うと動きが止まった。

「どうした？」

あんまりにも呆然とした顔に、ポケットに手を突っ込んで問いかける。

「どうしたって……」

鸚鵡返しのような答えに、思わず笑いが込み上げる。

「お前もそんな顔するのな。ちよつと、今、いいか？ 話、あつて」
勝手に隣の席の椅子を借りて、腰を下ろす。

彼女は驚きながらも、小さく頷いた。

「私も、謝らないといけないと思ってて……。その、慶太に聞いたよね？」

たどたどしく紡がれる言葉に、にやりと笑って机に頬杖をつく。

「不感症、あれ、慶太の入れ知恵なんだって？」

途端、真っ赤になる顔に、笑いが込み上げる。

「なんちゅー言葉を、幼馴染にいわせるんだってんだよね？」

俺が笑った事に少し安心したのか、ぎこちなく口元を上げる。

「慶太は、悪くない……から。ごめん、無理言っで、その、協力してもらったというか」

「ああ、聞いた。慶太にも、あんまり苛めないでやってくれって言われた」

「ははは、そつか……」

片手で首元を押さえながら、彼女は小さくごめんねと呟いた。

「ストーカーみたいな事して、ごめんね。もう、しないから」

「こつちこそ、いろいろありがとな。それと、いろいろごめん。無神経、だった」

俺の言葉に、うつ向き加減だったその顔が、ぱつと持ち上がる。

「涼介が謝ってる……。これで二回目、凄いいアだわ」

「なんだ、そりゃ。つか、まあそれはいいんだけど。言っておこうと思うて」

何を？ という風に首を傾げた彼女を、頬杖をやめて真正面から向き直る。

「俺、莉子の事、好きだ」

「……」

彼女は、数回瞬きをして、目を細めた。

「やっと、気付いたの？」

それは少しだけからかう様な、声音を含んでいて。

「やっと、気付いたんだよ。で、昨日、告白してきた」

「え、早っ！」

それには驚いたようで、真顔で引かれた。

で、どうだったの？ と、しばらくして聞かれた問いに、苦笑を返す。

「涼介くんの制服姿、大好き。だって」

「は？」

「んでその後、修平くんのユニフォーム姿が大好きよ、と、一緒にいた修平に対しても言ってたな」

「え？」

何それ？ という視線に、大げさに肩を竦める。

「莉子にとっての俺は、制服を着ている涼介くんなわけ。恋愛対象として、まったく見られてないわけで。あたって砕け散ってきました」

軽くおちゃらけて伝えると、呆氣にとられたような顔は見る間に笑顔に変わって、噴出すように笑い声を上げた。

「莉子さんらしい！ 昨日も写真撮りたくてうずうずしてたものね？」

「まったくだ。学ラン着てなかったら、学ラン着て来い、眼鏡もつてこい、写真撮らせろって叫ばれた」

視線を合わせて、笑いあう。

ひとしきり笑って痛くなった腹をさすっていたら、彼女がそれできと、口を開いた。

「諦めるの？」

挑発するような、笑み。

それに返す、否定の笑み。

「いいや？ 人生で初めて俺のプライドを壊してくれた人を、そう簡単には諦めないね。追いかけるよ、似合わなくても」

「そう、よかった」

そう言っただけは、椅子から立ち上がった。
少し腕を伸ばして、身体を伸ばす。

「話してくれて、ありがとう。私、帰るわ」

机の横にかかっていた鞆を手にとって、俺を見下ろした。
どこかすっきりしたようなその顔に、慌てて礼を言う。

「あのさ、ありがとうな」

彼女は翻そうとしていた身体を止めて、苦笑したまま首を傾げた。

「何もしてないわよ、別に」

「いや、この感情に気付かせてくれたのは、お前のおかげだから」

その言葉に、くすりと笑って歩き出す。

「本当に素直になっちゃって、涼介じゃないみたい。ま、頑張ってるね」

そのまま教室から出て行こうとした彼女を、俺は立ち上がって呼び止めた。

「敷島」

「……え？」

既に教室から廊下へと足を踏み出していた彼女は、驚いたように振り替える。

俺はその顔を見ながら、もう一度彼女を呼んだ。

「敷島 美優。お前の名前だろ？ 今度は、覚えてからな」

彼女——敷島は、瞬きを繰り返して、目元を和らげる。

「ありがとう、……宮下くん」

そう言って、廊下へと消えていった。

俺は立ち尽くしたまま、もう一度心の中で“ありがとう”と呟く。

礼を言うべきは、俺だ。

プライドを崩したのは莉子だけど、最後は敷島、お前が壊してくれ
たんだから。

包囲・1

きみの恋愛感情は

一体どこにあるんだろう

ていうか――

そもそも 持ってますか？

第六章 包囲

「いやー、やっと終わったよー」

あと一ヶ月で卒業式を迎えようという、二月の初め。
私大受験組だった慶太の合格が決まった。
それまで週一登校だったけれど、合格発表の翌週から俺たちと一緒
で週三登校に変わった。

「お疲れー、慶太」

俺の席の横にしゃがみこんでいた修平が、そのままの体勢で顔だけ慶太に向ける。

「おー、やつと楽できるなー」

机に頬杖をついたままにやりと笑うと、慶太は机の横に鞆をかけて学ランを脱いだ。

「まあね」

椅子に腰掛けた慶太は、持ってきたカフェオレのペットボトルを開けて口をつける。

そのまま一口飲み込むと、長い溜息を吐き出す。

「まだ一つ、難関が残ってるんだけどね」

苦笑するように呟いたその言葉に、修平と顔を見合わせて首を傾げる。

「あれ？ 受験、まだ残ってるのか？」

確か先週受かった私大が、第一希望だつて聞いてたはず。

慶太はペットボトルのキャップを閉めて、それを机の上に置く。

「受験じゃなくてね。まあ、俺の話はいいとして。お二人さん、その後どうなの？」

慶太のその言葉に、思わず修平と目を合わせる。

そのまま思い思いに、溜息をついた。

「ダメだな、ありやすげえ難関中の難関」

「うん、どうすればいいんだろうっねえ」

俺たち各々の言葉を聞いて、慶太は面白そうに目を細める。

「そんなことだろうと思った。ま。俺は静観させてもらっつよ？ 二

人の泥仕合」

「泥仕合とは失礼な」

肩を竦めて、椅子の背もたれに体重をかけた。

「デート誘ってみても、告白してみても、まったく恋愛対象として見てくれない」

「俺も、まったくだよ。バスケットを一緒にやるくらい」

「あれ？ 抜け駆けおっけーなの？」

物珍しそうなものを見る、慶太の言葉に頷く。

「抜け駆けだろうがなんだろうが、関係ないね。女じゃあるまいし、気にするとこじゃねえだろ」

「だね」

「なんだか、仲のよろしい事で」

慶太がそう言ったところで、担任が教室に入ってきた。

各々が自分の席に戻っていく中、慶太が顔だけこっちに向けた。

「放課後、久しぶりに莉子さんに会いに行こうかな」

「ん？ なんで」

思わず聞き返す。

——だって

「会いたいからだよ」

そう笑う慶太の顔が、くろーい雰囲気満載だったから。

「わあ、久しぶりだね」

放課後、俺達となぜか慶太が連れてきた敷島の四人で、いつもの場所に座る莉子の前に立った。

相変わらず制服を着ているとすぐに俺たちに気付く莉子は、最近会っていなかった慶太と敷島に興味を惹かれたらしい。

さっと立ち上がると、俺達そっちのけでその二人の前に立つ。

「お久しぶりです、莉子さん」

につこりと外向けの顔で笑う慶太と、隣に立つ敷島。

「慶太ちゃんと……えと」

莉子が敷島を見て、困ったような表情を浮かべる。

「敷島 美優です、莉子さん。そういえば、名前言ってなかったですよね」

敷島は笑顔を浮かべながら、小さく頭を下げた。

その後、敷島とは友達として普通に付き合っているけれど、意外と礼儀正しい事に気づいた。

俺に付きまといていた頃が、嘘のようだ。

そうさせてしまうほど、俺の態度が悪かったと。はい、そーいうことでですね。

そっば向きながら昔の自分の態度を反省しつつ、若干反省しつつ？

「涼介」

その声に顔を向けると、莉子の隣に立つっている慶太が手で俺を呼んでいる。

いつの間にか修平と敷島は少し離れた場所にある自販機の前にいた。「何」

隣に立つと、慶太は莉子に向き直る。

「莉子さん、ちょっとお願いがあるんですけど」

「何？ 慶太くん」

突然の言葉に、莉子は首をかしげて慶太を見上げる。

その仕草に見慣れてきたとはいえ、頭を思いつきり撫でたくなる俺は、末期症状なのでしょうか。

「俺の恋愛相談、乗ってもらえます？」

「え？」

反応したのは、俺だった。

信じられないようなものを見るような視線を、慶太に向ける。

「お前、好きな奴、いたの？」

思わず小声になってしまふ俺に、慶太は苦笑する。

「人をなんだと思ってるの」

「冷酷人形」

「……ふうん」

一瞬の間の後に訪れた慶太の微笑みは、背筋が凍るほど怖かったです（被害者談）

言葉をなくした俺に、莉子は眉を顰めて非難の声を上げる。

「失礼だよ、涼介くん。で、何？」

途中から慶太に向かった言葉に、当事者が答えた。

「美優って俺の幼馴染なんだけど、なかなか恋愛対象に見てもらえないんですよ。どうしたらいいと思います？」

「えっ!？」

今度ばかりは、声を抑えられなかった。

出てしまった叫び声に自分で驚いて、両手で口を押さえる。

すぐに当たりに走らせた視線の先で、自販機からペットボトルを取り上げる敷島の姿が映った。

さすがにそこまでは、俺の声は届かなかったらしい。

内心、胸をなでおろして、慶太を凝視した。

慶太は少し俺の方に視線を向けたけれど、すぐに莉子に戻る。

「恋愛対象に見てもらえるには、どうすればいいんですかね」

俺は、その成り行きをじっと見つめる。

そんなことを莉子に頼んでも、無駄な気がしなくてもないけどちょっと聞きたいような――

莉子は少し考えた後、にっこり笑って慶太を見上げた。

「任せなさいっ!」

「……」

それはもう、楽しい遊びでも思いついた子供のような笑顔でございました。

——合掌（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8860k/>

きみを振り向かせるために

2011年2月20日11時27分発行